
Chaos Blood

水々火々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C h a o s B l o o d

【Nコード】

N 6 4 8 3 W

【作者名】

水々火々

【あらすじ】

千年前に「災禍の時」と呼ばれる大災害が起きた。人類の半分は死に絶え、苛酷な環境の中で人々は生きようともがく。

そんな折、世界に魔物が現れ、人類に牙を向くが環境への適応能力からか対抗するように能力者と呼ばれる人々が生まれる。

それから千年の時を経て、一人の青年と共に物語は加速する――

プロローグ（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

プロローグ

プロローグ

いつも通りの代わり映えのない日常。
ほとんどの人々はそう思っていただろう。

その日、一つの巨大な隕石とそれに連なる大小様々な複数の隕石が世界に衝突した。

衝突による影響は大きく、止むことのない地殻震動に津波、その後を訪れた大気汚染と氷河期の再来は生きとし生けるもの全ての脅威となった。

人類と動植物の生態系は乱れ、総人口の半分が一ヶ月で死に絶えた。

生き残った人類もただ死を待つだけ。それは救い難いほどに逃れることのできない事実だった。

しかし、何の因果か。墜落した隕石のいくつかには自浄作用があったらしく、空を閉ざしていた粉塵と有害物質をその身に取り込み、浄化していった。

大気汚染の軽減により半月ほどで氷河期も終わったが、人々とって決して生活できる環境とまではいかなかった。

劣悪の環境の中で生きていかなければならないのである。衣食住はもとより、生き残った人類が猜疑心に溺れるのも無理のないことだった。

ただでさえ少なくなった人口が日々争いによって、また飢えによって減少していく。

中にはコミュニティを形成し、その中だけで生活する術を模索する者もいたが、人の不満というのは際限なく、そのほとんどは内部の抗争で瓦解していった。

そんな中、一つの出来事によって人類は再度協力し、生き残らねばならない境地に立たされる。

それは環境の変化からか、今までに見たことのない異種の生物が時折出現し、その生物の本能なのか人を襲い喰らう。

自衛のため、人々は集団での行動を取るようになった。一対一では殺される確率が高かうが、集団戦、それも罠などの安全策を幾重にも張った状態での戦いでは下手を打たない限り死ぬことは少ない。

戦い。改善。戦い。改善。と繰り返すうちに数年が経った頃、またしても変化が訪れた。

苦境の中で新しく生まれた子供たちの中に常識では考えられない力が授けられてた者が確認されたのである。

のちにギフトと呼ばれる能力とそれを使役する能力者。彼らの能力は物理的なものからオカルト的なものまで様々で、これまでの戦いをより安定化してくれるものであったが、一つの大きな問題もあった。

能力の暴走。心身への負担がある一定レベルまでくると能力はその方向性を失い、周囲に脅威をもたらす。謂わば、ギフトとは諸刃

の剣であり、いつ自分たちにその刃が向くか分からない状況では結果として仕方なかったのかもしれない。

次第に能力者たちは管理されていくようになる。

人が人を管理する。通常の社会的構成であればごく普通のことだが、この管理とは通常の意味合いとは大きく異なった。

彼らを一種の道具として管理することにしたのである。当初の能力持ちの人口は非常に少なく、それぞれのコミュニティにより管理されることで解決策を導き出した。

どれだけ非人道的であろうとギフトの効率的な運用により、人類という一つの種の生存率が飛躍的に向上したのが事実だ。

人々はゆつくりとだが仮初の平和を受け入れつつあった。

それから——千年の時が過ぎた。

第一話 始まりの都市（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

第一話 始まりの都市

早朝、巨大な壁の前に数人の列が出来ていた。

そこには商業都市ブルドオムスの関所があり、一人、また一人と入っていく。

しばらくすると、一人の青年の番になった。

服装に関しては黒地の七分袖にジーンズといった一般的な服装。

唯一目を引くところがあるとすれば首にかかったいくつものネツクレスぐらいで、そのネツクレスの先端は服の中に隠れているためファッション性が高いとも言えない。

見た目は黒髪に若干蒼みがかかった黒い瞳。そして容姿はというと顔立ちはある程度整っており、百八十と身長はあるが体つきが細いため、一見優男に見えてしまう。

しかし、よくよく見ると分かるのだが、彼には無駄な肉がない。

まるで俊敏な獣のような青年である。

「オウカ・ライゼス。歳は十八で間違いないな」

「ああ、間違いない」

「この都市への目的は？」

この都市へ来る者の目的など二通りしかないが役人は規則どおりの確認をした。

「腕試しのついでに『災禍の種』の破壊」

役人にとっては何度も聞いたことのある類の回答だったが、それでも尚そう答えたオウカに目を瞠る。

千年前のあの出来事は『災禍の時』として語り継がれており、この都市も復興する際に商業を基盤に大きく発展したモデルの一つだった。

しかしながら何故ここまで巨大な壁が存在するかというと、大都市というのはそれぞれが『災禍の時』に墜落した隕石『災厄の種』（通称、『種』と呼ばれている）の一つ一つを封印するといった役

割を担っているからでもあった。

都市を覆う巨大で頑丈な壁とそしてその都市以上に広大な範囲を覆っている巨大な特殊仕様の絶壁。まるで比率の合っていないアラビア数字の『8』のような形で都市は存在する。

この千年間、確かにいくつかの『種』は彼らのような開拓者（マインナーな呼び名では冒険者）によつて破壊されたが、その規模は小さいものであった。しかし、それでも多くの犠牲と実力者の協力もあつて成し遂げたことである。偉業といつてもいいくらいの難事なのだ。

付け加えるとこの商業都市ブルドオムスが封印している『種』は決して小さくはない。それはこの都市の規模からも考えられることだった。都市の直径が一五キロに対して封印区域の直径は七十キロにも及ぶ。

都市と封印区域の門を潜つてもその道なりは一直線ではない。これは封印区域によつて異なるのだが、地面が隆起していたり、熱帯または雪原などその種類は様々だ。

そして大半の『種』は地表よりもずっと下の位置に存在しており、一番厄介なのが墜落跡となる巨大な穴が何故が存在しないため、探索者はどう目的地に辿り着くかから考えねばならない。それはつまり地道に目的地までの道を探るか、作るしかないのが現状ということでもある。

またこの都市が抱える封印区域の内部は密林となっていた。まず一日では目的地に届くことはできるはずもなく、また何日かけて無事辿り着くことができたとしても小さくて二トントラック一個分の大きさである『種』をどう破壊するかが問題なのだ。

それをこのオウカという男は特に気負うこともなく言つてのけた。真性の大馬鹿者なのか、よほどの自信家なのかどちらかだろう。

「ふむ。本気がどうかは知らんが、一人であそこを攻略するのははつきり言つて無謀だ。門へ入るのもギルドでの手続きが必要になるし、そこで仲間でも集めてから行くんだな」

いくらこの場限りの付き合いでも目の前の男に死なれるのは目覚めが悪いのだろう。役人は扉の先を指差した。

「ここを抜けて真っ直ぐ行けばギルドだ。看板も出ているしすぐに分かるだろう」

そう言うつと審査のために預かっていた二振りの剣をオウカに手渡した。

受け取った本人はというと、黙って役人をじっと見ている。

「何だ。何か質問でもあるのか？」

するとそれまで退屈そうにしていたオウカの表情が悪がきのように微笑んで、

「いや、おっさんいい人なんだなって」

まるで友人のように話しかけてきた。初対面の人間に対しては些か無礼な発言であるが、この青年の表情から悪意は感じられない。

役人もそう思ったのか、盛大に溜め息をついて再度扉を指差した。「質問はないんだな。だったらもう審査は終わりだから行け。さっさと行ってしまえ」

オウカは苦笑しながら「ありがと。助かったよ」と言うと、目の前の扉を開けた。

扉を開けると、オウカはその光景に目を奪われた。

目の前には乱立するビルや商店、そして出店などがそれぞれエリア分けして展開されており、その中を少なくない人々が行き来している。

千年前に総人口が半分以下になったとはいえ、確かに現在人口は増えている。しかし、ここまで多くの人がいるのを見るのは初めてだった。

オウカが今まで住んでいた場所や故郷では多く見積もっても百人に満たないくらいが普通である。祭りか、何かの行事でもない限りここまでの人を見る機会というのはなかったのだ。

「これがブルドオムス。確かに大都市に分類されるだけはあるな」
やや呆れた感のある感想をつぶやくと、ふと思い出したように苦笑した。

これなら確かにあの子が一緒に付いていくと駄々をこねたのも分かる。

剣の修行でオウカが一年ほどお世話になった家に一人の少女がいて――彼にとつては姉弟子にあたるのだが――年齢やその言動から次第に本当の妹のように面倒を見ることが多かった。

オウカとも年齢が近いお陰か、その子もちらを兄のように慕ってくれていたのだが、一ヶ月前にこの都市へ行くことを話したところ「私も付いていきますっ！」と凄い勢いで懇願されたが、両親の必死の説得（最後は泣き落とし）ですったもんだの末、渋々ながらも同行を断念したという出来事があった。

それからオウカが旅に出るまでの間にも色々あったのだが、今はそれよりも早くギルドに登録をしなくてはここに来た意味がないと棒立ちだった足を進ませる。

実際関所からギルドまでの距離はそれほど離れておらず、少し歩いたところで看板が見えてきた。

ギルドの中に入ると、数人の開拓者たちがいくつかのグループに分かれて話し合っているのが見受けられる。

ベテランからアマチュアまで『種』の攻略やそれに関する依頼の作戦会議中というところだろう。ほとんどの者が、今入ってきたオウカに対して興味を持っていないようだった。

まるでそれが当たり前のことであるようにオウカはそのまま奥の受付に向かう。

「初めてギルドを利用するんだが、登録はここで問題ないか？」

「大丈夫ですよ。基本的には登録から依頼の請負までここで行っています」

オウカに声をかけられたのはギルドの制服を着こなした二十前半の女性職員で、胸元にはネームプレートでイリアと表示されていた。淡い栗色の髪が腰まであり、その瞳は琥珀色。美女といって申し分ない容姿をしている。

有体にいえば出るところは出て、引込むところは引込んだ体つきをしていた。

ちなみにこの都市に在中している開拓者の大半は彼女が目的で足しげく通っているのだが、今のところ彼女を振り向かせることが出来た者はいない。

そんな彼女に対して、まったく物怖じしないオウカはよほど肝の据わった男なのかもしれない。

「それなら早速で悪いが登録をお願いしたいんだが」

「では、こちらの書類を確認してから記入してください」

記入事項の内容は一般的なことから始まり、現在保有している能力も記入するようになっていた。

千年前とは違い、現在ではギフトというのはそれほど珍しくなくなっている。そのため、昔のように能力者＝道具としての扱いはなくなった。

そして、その珍しくなくなった大きな要因が人工的なギフトの取得である。それは技術の進歩のお陰であり、それまでに犠牲になった能力者たちのお陰でもあった。

具体的には誰もが適応能力さえあれば、後からギフトを追加することが出来るのだ。

といっても、その能力を得るためにはギルドにて購入しなければならぬ。もちろん、ギフトに応じて相応の金額が求められる。

例えば、探索者の生存能力を高める『解析』に関しては比較的安価で購入できるのに対して、戦闘的な意味合いで使用の多い『炎』

や『氷雪』など外因的效果を付与した能力は非常に高価な金額と共に制約が求められる。

制約とは、使用の用途やそれを違反したときに発生する罰則などの注意事項を了承した後、個人のプライベート情報を年に一度申請しなければならぬことを表す。

そのため、探索者の中でもそれなりに経験と金額を稼いだ者でないと、簡単には新しい能力を得ることができないのだ。

全ての記入が終わり、オウ力は再度女性職員に声をかけた。

「はい、では確認させていただきます」

イリア・フオウントはその書類を見て、硬直してしまった。

一般事項の内容に関して問題らしい問題はなかったのだが、能力保有欄に記入されている種類が問題だった。

『俊敏』『高速思考』『解析』『見切り』そして、『蒼の守護』

四つのギフトは今まで見たことがあったが、この『蒼の守護』に関しては見たことも聞いたこともない。

偶に探索者という職業を楽しんで金銭の稼げるものとして冷やかしに来る者もいるが、目の前にいるオウ力という人物はそれに該当しないだろう。あくまで憶測、いやそんな気がするというだけだが何故か間違っていないはずだ。

しかし、それならばこの技能に関していえば全て生まれ持ったギフトということになる。

そもそも五つものギフトを生まれながらに持つということは極めて稀だ。

一体、オウ力という男は何なのだろう。

出口のない思考に耽っていると不安になったのか、当の本人が声をかけてきた。

「すまない、何か不備でもあったか？」

「あつ、いえ大丈夫です！ 気にしないでください！」

イリアは慌てて応えると同時に、つい柄にもなく大声を出してしまったことに赤面してしまった。

「ならいいんだが……」

オウカ自身はあまり気にしない様子だったが、これには周り（イリアファン）が黙っていなかった。

いつの間にか二人のやり取りは注目を受けていたようで、血の気の多い者は既に席を立てオウカに殺気を飛ばしている。

それに対してオウカはどこ吹く風で流していたが――周りの様子に気づいたイリアは営業スマイルをフルに発揮して周囲を落ち着かせる。

その効果は絶大で、こちらを見ていた全ての者が「でれっ」とした表情に変わり、先程のことなど忘れてしまったぐらいだ。

まるで他人事のように眺めていたオウカは同類を見つけたように、「お前も苦労してるんだな」

と優しく労わるように言った。そう、言ってしまった。

最初はその言葉が上手く理解できなかったのか、イリアはきょとんとしていたが、言われたことがだんだんと馴染んでくると先程とは違った意味で顔を真っ赤にして怒鳴った。

「あなたに言われたくありませんっ！」

顔を赤くして怒っている彼女を見てオウカは微笑んでしまった。

「何を笑っているんです！ オウカ！」

「いや、わるい。何だかさっきまでと違ってこっちの方が話しやすいと思うて」

屈託なく笑いながらそういうオウカの顔を、イリアは今までこれ程まじまじと見たことがあるつかというほどに見つめてしまった。

そんな二人の時間は、無粋な邪魔が入ったことで終わりを迎えた。「ごほん、あゝイリア君。大きな声が聞こえたが大丈夫かね？」

イリアはその声に酷く緊張したが、声がした方へ振り返るときには動揺の欠片も見えない笑顔を貼り付けた表情で迎えた。

「お騒がせして申し訳ありません、グラン副所長」

イリアに声をかけたのは、猫背で痩せおり、どこか神経質な雰囲気をかもした男だった。

「いや、問題ないのならいいんだよ。何かあったらすぐ僕に言うんだよ。僕は君の事が気に入っているからね」

「ありがとうございます。何かあったらご相談します」

あくまで事務的に答えるイリアに対して、グランという男は粘着質な目線を彼女に向けながら去っていった。

そして一瞬だけ、オウカに目線を移すときに蛇に酷似した絡み付く殺気に、イリアは気づくことはなかった。

溜め息を堪えつつ、イリアが再びオウカの方を見ると、彼は無表情でグランの去った方向を見つめていた。

「あの、オウカさん。どうかされましたか？」

するとオウカは先程の表情がまるで嘘のようにラフな感じで応えた。

「なんでもない。それよりも、さっきみたいにオウカと呼び捨てにしてくれ」

「あ、あれは、申し訳ありませんでした」

縮こまったようにしてイリアは謝罪したが、当の本人は不満げな表情を浮かべる。

「気にしないでくれ。というよりも、俺にはあっちの方が楽なんだが」

「そんなわけにはいきません。お客様に無礼なことではできません」
イリアがそう言うと、オウカは意地悪な表情になった。

「それなら仕方ないか。じゃあ、俺だけイリアを呼び捨てにするよ」
イリアにとっては本当に珍しいことに三度硬直する。

「……あの、オウカさんって結構意地悪ですか？」

「何を言うんだ。俺のようにこれ程清廉潔白という言葉が似合う男

はいないぞ」

我慢していた溜め息を盛大に吐き出すと、イリアは半眼でオウ力を見据えた。

「分かりました。オウ力、あなたの言うとおりにしましょう。ただし、これ以上不真面目な態度でいるようなら分かっていますね？」

「もちろんだ」

オウ力は嬉しそうに、まるでシツポを振る犬のように頷いた。

軽く頭痛を覚えるイリアだったが、表情を見る限り決して嫌そうには見えなかった。

まるで我侘な弟の面倒でもみる姉の心境というやつだろうか。

「ではオウ力、ここに記入されている内容に間違いはありませんか？」

「自分のことだ、間違えようがない」

「それでは確認なのですが、この『蒼の守護』というのはどういうギフトですか？」

「秘密だ」

「なるほどって……え、秘密？」

「そうだ、秘密だ。確か確認事項の中には記入の義務があったが、その詳細について答える義務はなかったはずだが？」

「そ、それはそうですね……」

オウ力が言うようにギルドの登録では記入の義務はあっても、個人に不利益な内容であれば黙秘権を行使することが出来る。

出来るといっても実際にそれを行う者も少ないし、ギルドの心証も悪くなるから基本的には普通はしない。

つくづくオウ力という男は規格外のようなのだ。

「それなら仕方ありません。その件については保留としますが、これだけは答えてください」

オウ力は無言で促す。

「使用する剣技は二刀流。そして現在はシングルで登録ということですのでよろしいですね？」

「そうだが、何かまずいことでもあるのか？」

ここまで常識知らずの人を見たことがありませんとばかりに、イリアは呆れと眩暈を感じた。

「まずいことも何も、まずありえません。一人で行動して、『種』を破壊するだなんて自殺志願者以外の何者でもありませんよ」

「そうなのか？」

「そうなのかつて！ もうオウカさんは非常識です！」

先程のこともあり、イリアは声を絞って、周りには聞こえないぐらいの大きさをオウカを注意する。

本当にギルドへ登録する気があるのかしらとイリアが疑問に思っている、それを訂正するようにオウカは言葉を足した。

「しかし、世の中にはシングルで行動する開拓者もいると聞くんが、俺の勘違いだったか？」

「確かにギルドに登録されている方でシングルで行動する方もいますが、それは最高位のランクを持つほんの一握りの方たちだけです。その方たちも何か大きな依頼があったときは、契約しているパーティと合流して行動しています」

イリアの言葉は実際に正しいが、実のところオウカは自分なら何とかなると考えていた。

『蒼の守護』もそうだが、オウカにはもう一つの理由で問題ないという確信もあった。

そんな悪巧みを見破ったのか、イリアは半眼でオウカを見つめた。「あの、オウカは自分なら何とかなるとか思っていますか？」

「まあな」

ここで素直に、愚直に答えてしまふあたり、オウカという人物が伺える。

「まったくあなたという人は……」。

分かりました。ではオウカのギルド登録はこちらから提示する条件をクリアしてから正式に採用しましょう」

「条件？」

「ええ、これでも私はギルドの職員です。あなたが死なないように、その適正を確認させていただきます」

イリアはそう言う、「ちょっと待ってくださいね」と席を離れ、壁に設置している通信機で誰かと連絡を取りだした。

オウカは会ったときは大きく雰囲気が変わったイリアを見ながら、これからどんな条件を出されるのか思案していた。

正直なところ、オウカは初めの頃、そこまでイリアと関わるつもりはなかったのだ。

世界にはまだ多くの『種』が存在し、その猛威を振るっている。

この都市はその一つに過ぎず、すぐに破壊して、新しい場所へ向かおうと思っていた。

だが平和だと思っていたこの都市も色々あるようだ。

(――少しばかり様子を見てみるか)

オウカがそう思考を終えると同時に、イリアの方も通話先と話がついたようで戻ってきた。

「お待たせしました。こちらからオウカさんに提示する条件とは、ダブルスを組んで一つの依頼を達成していただくことです」

シングルは一人のこと。ダブルスは文字通り、二人のことを表す。

「しかし、俺にはまだこの都市の知り合いはいないんだが」

「はい、それも承知してます。何せオウカですからね」

何だか納得できないことで、イリアは予測していたようだ。

「そこで私の知り合いの開拓者を紹介します。」

先方には既にこちらから連絡を取り、了承をいただきましたので心配しないでください」

そういうイリアの表情はどこか楽しそうで、それを見たオウカも深く考えずに了承した。

「分かった。そういうことなら早速行動したいんだが、今からでも大丈夫か？」

「もちろんです。相手は門で待っているはずなので、そちらに向か
ってください」

オウカは頷くと、パートナーの特徴などを確認しようとしたが、
イリアはいじめっ子のような笑みを浮かべて意味深に言った。

「オウカが探さなくても、相手の子がきつと見つけて声をかけてく
れます。」

ですから、分かりやすいように目印をお渡ししますね」

イリアが机の中で何やら探しだして、目的の物が見つかったのか、
その笑みは更に輝きを増した。

それと同時に、その目印を受け取ったオウカの表情は反比例する
ように暗くなったという——閑話休題。

第二話 封印区域（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

第二話 封印区域

「おい！」

昼の太陽の下、オウカが下を向いて歩いていると、少女の明るい声が遠くから聞こえてきた。

きっと誰かと待ち合わせをしているのだろう。そして、待ち合わせの相手が来たところなのだ。

オウカは他人事のように考えながら、未だテンションの戻らない状態で下を見続けた。

「おい！ 君だよ、見習い君！」

「ぐっ……」

オウカがテンションを直下させていた理由は、その左腕の腕章にあった。

腕章自体問題ない。何かの折に着けることは必ずある。

あるのだが、その腕章に表示されている文字が問題だった。

『開拓者見習い（仮）』

これこそが、イリアが満面の笑みでオウカに渡した物だった。

当然、オウカは拒否したのだが、これを着けないと開拓者の試験が受けれないと言われては着けざるを得ない。

そんなやり取りがあった後で、殊更それを強調されて呼ばれたのだ。

それは屈辱以外の何物でもないだろう。

今度こそオウカは声がした方へ頭を上げて、思いっきり視線をぶつけた。

並大抵の者であればその視線に含まれた威圧に飲み込まれるのだろうが、そこはイリアの紹介する開拓者というだけあって問題ないようだ。

「そうそう君だよ。何で無視するかなっ」

そう言っただけで彼女は両腕を腰にまわして、いかにも注意しています

といったポーズをとった。

その姿がどこかで会ったような既視感をオウカに与える。

それもつい最近に会ったような。

目の前の少女の容姿を改めて確認する。

淡い栗色の髪は肩ぐらいまでのミディアムで整えており、くりつとした瞳は琥珀色。服装は動きやすさを優先した七分袖の白シャツに、同じく七分丈のモスグリーンのカーゴパンツ。

更に胸部と手足の両方に強化プロテクター、そして腰にはダガーが装備してある。

彼女も間違いなく美少女の部類に入るのだろうが、彼女の浮かべる表情の豊かさと服装から、どちらかというと可愛いらしさを感じてしまう。

「……もしかして、イリアの家族か？」

オウカが何とか自分で導き出した答えを述べると、少女は微笑んだ。

「正解。正確には妹だけだね。

ミレット・フォウントです、よろしくっ」

ミレットはオウカに勢いよく右手を差し出した。

オウカ自身は姉とのギャップに面食らっていた様子だったが、あまりのフランクさに微笑んで、同じく右手を出して握り返した。

「オウカ・ライゼスだ。こちらこそ頼む」

オウカはてつきりすぐ手を離すのだろうと思っていたのだが、なかなかミレットは手を離さない。

不思議に思ったオウカが、彼女に目で問いかけると、

「ふーん、お姉ちゃんが言ってたような人には見えないけどなあ」

思いつきり気になることを言われた。

それに対してオウカは、人のいい笑みを浮かべながら確認する。

「一体イリアは俺のことを何って言ってたんだ？」

「えっと、腹黒そうなんだけど、意地悪でもあって、でもいい人そうだから」

素直に暴露してくれたミレットに感謝しながら、オウカは楽しそうに笑った。

「そうか、イリアはそんなことを言っていたのか。開拓者になって再び会うのが楽しみだ」

実のところ、オウカはそんなに自分の評価を気にしていなかった。気にしていたのは、イリアが仕事でもプライベートでも自分を押し殺してストレスを溜めてしまう気質なのではないかということところだ。

特に先程のギルドでグランという男が声をかけたときなど、イリアは一瞬怯えた表情を浮かべていた。

正直他人事と言われてしまっっては如何しようもないのだが、少し気をつけていた方がいいだろう。

だが、その心配も杞憂のようで家族には気兼ねなく接しているらしい。

それはたぶんこの子や家族がそういったストレスを解消しているのだと、オウカは目の前の少女を見て納得した。

オウカとミレットは同時に手を離して、これからのことを話し出す。

「イリアに言われてここまで来たが、これから俺は何をすればいいんだ？」

「今回はオウカが開拓者の適正があるかどうかの確認だから、門の中に入ってから詳しいことを話すよ」

ミレットは巨大な壁に設置された、高さと同幅が同じく五メートルの門を指差す。

それに従ってオウカは改めて都市と封印区域の境に目を向ける。間近で見るとその壁の威圧感はかなりのもので、さすがのオウカでも果然と最上部まで眺めてしまった。

「やっぱ、初めて見る人にとってはこの光景は壮観だよな」
脇からミレットの声を聞き、オウカは苦笑する。

「ああ、こんな光景は都市ならではだな」

オウカは同時にその壁の中から感じる気配に、好戦的で寧猛な感情が沸き立つのを感じた。

「それよりもオウカ……ここに来るまでに装備とか準備しなかったの？」

ミレットはそんなオウカの黒い喜びに気づかなかったのか、当然の疑問を口にした。

「装備ならしているぞ」

ほら、とオウカは腰に提げた二振りの剣を見せる。

「いや、そうじゃなくて防具のことを言ってるんだよ。」

見た限り、それ何の『防護』もかかってないよね？」

ミレットの言うとおり、オウカの服装は通常の服に違いない。

開拓者の中には大金を出してまで衣服に『防護』の効果を付与してもらおう者もいるが、明らかに店で防具を買った方が安く揃えることができる。

つまり『防護』付きの衣類で着飾るのは、金持ちの道楽という意味合いが大きい。

「今からでも買いに行こうか？」

親切心とオウカへの不注意を指摘する形でミレットは提案をしてきたが、当の本人は首を振り断った。

「防具を付けると動きが鈍るから、このままでいい。」

それに現役の開拓者の実力も確認したいしな」

ミレットは姉のイリアと同じような呆れた表情で、長い溜め息をついた。

「前言撤回。お姉ちゃんが言ってたこと、何となく理解した。」

でもこれだけは守って。危ないと思ったら私を置いてでも必ず逃げること」

さつきとは打って変わって、ミレットの真剣な表情にオウカは無言で肯く。

「オーケー。じゃあ、行こっか！」

門の中に入るのは、はつきり言うとお簡単だった。それもこれも、現役の開拓者が同行してくれているお陰だろう。

中に入れば、すぐに封印区域という訳ではなく、広くて長い通路をメインとし、複数の通路に分かれていた。魔物が都市へ侵入することを防ぐための対策の一つでもある。

もつとも、普段からメイン通路は頑丈な防壁が降りているため、オウカとミレットの二人は別の通路から封印区域へと向かっていた。ここまでの道すがら複数の門番やスタッフとすれ違ったのだが、その全員がミレットを見かけると、それぞれ挨拶してきたり、手を振ったりしてきた。

「ずいぶん人気者なんだな」

オウカは分かりきったことを確認するように述べる。

「昔からここに住んでいるからね。みんな顔見知りだよ」

この人懐っこさがミレットの魅力であり、いるだけで周囲が明るくなるのだから当然のことなのかもしれない。

しばらくオウカとミレットが雑談しながら歩いていると、目の前に入ってきたときと同じ形式の門に突き当たった。

「ここから封印区域だけど、準備はいい？」

「大丈夫だが、実際俺は何をすればいいんだ？」

元よりこれはオウカが開拓者になれるかの試験だったはず。その条件が分からないままというのも些か間抜けな気もする。

「そうだったね。今回の条件は、この封印区域にいる魔物を三匹倒すことだよ。」

もちろん、危なくなったら私もフォローするから心配しないで」

「特に魔物の指定はないのか？」

「ギルドの依頼によつてはそういったものもあるけど、今回はなし。」

ただ『種』が近くなればなるほど、そこに生息する魔物の強さも格段に上がるから気をつけてね」

「了解した。」

ちなみに参考程度なんだが、依頼で複数の魔物を討伐した際にギルドへの申請はどうするんだ？」

魔物は『種』の周囲に自然と湧き出すようで、未だにその実態が解明されていない。そのため、長期間放置しておくで封印区域から溢れ出すことも可能性として挙げられている。

しかしながら、そのような事態になることは各都市のギルドが正常に運用している限り、まず起こりえないことだといえる。

オウカの疑問にミレットは更に疑問を投げかける。

「その質問に答える前に確認なんだけど、オウカは狩猟ってやったことある？」

「あるがそれがどうした？」

「それなら簡単なんだけど、通常生き物を殺めるとそこに残るよね。でも封印区域などにいる魔物は違っていて、倒すと体の一部を結晶にして後は消え去るの。それも魔物によって残る結晶は決まっているから、間違えることもないし。」

で、さっきの回答なんだけど、何々を何匹討伐するって依頼があったら、それに見合った結晶を回収してギルドに提出すればいいってわけ」

「なるほど、それなら確かに個人でも運べるし、分かりやすいな。」

だが、集めた結晶はどうしているんだ？」

これまでも多くの開拓者が回収してきたであろう結晶の数を考えると、その数は膨大なものになるはずだ。

「それに関しては魔動炉の燃料とかに使われてたりするから、たくさんあってもデメリットはないよ」

「すまん、魔動炉ってのは何だ？」

質問してばかりだな、とオウカは思いながらも、ここで聞けることは聞いてしまった方が早いとして尋ねた。

「ん、魔動炉っていうのは封印区域を囲った壁の特殊フィールドを発生するのに稼動している装置のことかな。

ついでに言うと、特殊フィールドってのは魔物が発する気配みたいなものらしいよ」

「つまり、擬似的に壁を縄張りと思わせているってことか」

「そうそう！ そんな感じかも！」

魔動炉の常時稼動にどれだけの結晶が使われているのか定かではないが、確かにそれなら多くあるに超したことはない。

「すまない、色々と聞いてしまつて。

だが、ミレットのお陰で助かった。ありがとう」

オウカの言動を見ていると不遜な感じが多く見られるが、礼を弁えるということはしっかりしていた。

ミレットはしばらくの間、オウカの感謝の言葉に驚いていたが、嬉しそうに微笑むと、

「いえいえ、ギルドの先輩として当たり前のことですよつ。

それじゃあ、そろそろ中に入りますかっ」

門の開放レバーを引いた。

重い音をたてながら開くその門を見ながら、オウカはやっとここまで来たと、ミレットとは違う意味で微笑んだ。

一言で表すと森。

そんな光景が門の向こうには広がっていた。

現在、オウカとミレットの二人が立っている場所は、門から近くの広場のような空間だった。

「噂には聞いていたが、ここまでとはな」

森とはいっても、ただの森ではない。

それぞれの木々の一本一本の大きさが通常の数倍になって生えているため、まるで自分たちが小さくなったかのような錯覚に陥りそうになる。

まだ昼だというのに、高い位置に覆い茂る葉や枝のせいで辺りは薄暗くなっている。

「オウカ、ここに入っただけには呆けていられないからね」

ミレットも真剣な面持ちで周囲を警戒している。

その言葉にオウカは浮ついた精神を落ち着かせる。

「すまない、気をつける」

すると人間の臭いに釣られてやってきたのか、一匹の魔物が奥の暗がりからこちらを窺うように近づいてくる。

「グリーンドッグか。この辺りだとまだ弱い部類の魔物だから、一人で大丈夫だと思うよ」

ミレットは魔物を見据えて、オウカに説明する。

グリーンドッグは名前の通り、全身を植物で侵食された大型犬といった形状をしていた。

相手はまだこちらの様子を見ているようで、じっとしている。

オウカは魔物が動かないのを見て、

「ミレット、アイツを倒してきてくれ」

とミレットに場違いなお願いをした。

「え、ええええええええっ!？」

「な、え？ わたしがやるのって、何こんなときにふざけてんのっ!」

当然ミレットは怒ったが、オウカは真面目に答える。

「いや、ふざけてなどいない。まずは手本を見たいと思ったただけだ」
「む、そう言われると確かにすぐは戦えないか」

実際のところ、オウカとしてはあの程度の魔物など一瞬だが、ミレットの実力を判断する材料が欲しいため、それを手本という名の建前をお願いしてみたのだ。

「じゃあ、わたしがアイツを倒すから、よく見ててね」

そんなことは露知らず、ミレットは腰のダガーを抜き取って構えを取る。

グリーンドッグもこちらの敵意を感じ取ったのか、体を絞るように低くして唸り声をあげる。

後はお互い無言で走り――交差した。

ミレットが一瞬早く大地を蹴ってグリーンドッグの頭上を取り、右手に持ったダガーでその無防備になった首の付け根を一閃し、勝負は決まった。

無駄がなく、そして手馴れた動きであることは、離れた場所から見ていたオウカでも分かった。

ミレットが着地するころには、首と胴体の分かれたグリーンドッグから黒色の煙が吹き出て、しばらくすると最後には緑色の牙のような結晶だけが残った。

他に敵が居ないことを確認して、ミレットはオウカに手を振る。

「おーい、どうだった？ 参考になった？」

「ああ、いいものを見せてもらった」

ミレットの大体の実力を今の動きで把握したオウカは満足そうに頷く。

「だったら今度こそ、オウカの番だから気合い入れてよっ」

戦闘による疲労もなく、いつもの様子でミレットは走ってオウカのもとへと戻る。

しばらく二人は無言で当てもなく歩いていたが、痺れを切らしたのかミレットは立ち止まった。

「……どうした？」

「もうっ、何であれ以降魔物が出てこないのよ！」

オウカが声をかけると、ミレットは地団駄を踏んだ。

「俺に聞かれてもなあ……」

「それはそうだけど、普通は一時間も歩いたら何度か魔物と遭

遇するはずなのに……何で今日に限って出てこないのよ」

ミレットの言うとおり、二人はその後、開拓者が通りやすいように整備された道を道なりに歩いていたのだが、あれ以来魔物の出てくることもなく、ただの散歩という微妙な時間が過ぎてしまっていた。

「せっかく機会があつたのに、わたしが一人で倒してしまうなんて……」。

あれじゃあ、わたしがオウカのチャンスを奪ったみたいで……本当にゴメンね？」

「いや、あれは俺がミレットに頼んだことだから気にしないでくれ。それに現役の開拓者の動きというのが間近で見れて、ホント勉強になったから」

思わぬミレットのネガティブな一面を見てしまい、慌ててフオロ―するオウカ。

元が色々と考えているだけに、素直な感情には弱いようだ。

「でもどうしようか？ もう少し歩いてみる？」

「それなんだが、少しだけ時間をもらえれば、魔物の気配を探すことなら出来ると思う」

オウカは先程の魔物が発する気配を覚えていたのだが、敢てそれをミレットに言わなかったのは、ミレットもそういった技術を会得しているだろうと思っていたからだった。

しかし、ミレットの言動を見るにそのようなものは持ち合わせていないらしい。

「え？ それって魔物の位置が分かるってこと？」

「そんなところだ」

「それって『探査』のギフトを持ってるってことじゃない！ 何で早く言ってくれないのよっ」

「いや、俺はそんな便利なギフトは持ってない。それに気配を探すって言つたろ？」

早合点しかけたミレットに、オウカは訂正を入れる。

『探査』というギフトは能力者の適正能力にもよるが、対象となる存在、または物に対してある程度の場所や距離を把握する能力を表す。

「俺のはさつきみたいな魔物の気配を感知する技術であって、ギフトじゃない。」

「たまたま俺の師事していた方がそうだったことも教えてくれたんだ」

「へえ、すごい便利な技術だね。それってわたしも覚えられるものなの？」

「先程の不満げな表情とは打って変わって、ミレットは興味津々で尋ねる。」

「ああ、はじめは時間がかかるだろうが、ミレットならコツさえ覚えれば大丈夫だろうな」

ミレットの素質の高さから、オウ力は素直にそう答えた。

「やった！　じゃあ、今度教えてよね。楽しみにしているから！」

「分かったが、その前に課題をクリアしないと」

「喜ぶミレットにオウ力は苦笑しながら約束をすると、目を閉じて魔物の気配を探った。」

普段は目を閉じなくても近くにいれば分かるのだが、ミレットの言うように一時間も歩いて魔物の姿はおろか、その気配を感じるこ

とがなかった。

「ここに来るまでに聞いた話やここが封印区域であることを考慮すると、まず通常では起き得ない状況なのだろう。」

（観光気分はここらでお終いだな）

静かに、オウ力は気配を探す範囲を広げていった。

目を瞑ったオウ力を見ながら、ミレットは昼にあったやり取りを思い出していた。

ミレットが所属しているパーティはこの都市では結構有名で、若

手が多いながらも依頼の達成率がかなり高いということもあって、彼らを指名で依頼が入ることもある。

主に封印区域の中でしか生息しない植物や鉱物の採取を得意としたパーティだったが、少なくとも魔物との戦闘において他のパーティに引けをとらない実力者の集まりでもあった。

今日の依頼はまさに指名の内容で、とある場所から薬草の採取とその周囲の探索ということもあり、ミレットたちは早くから門の中にある控え室で入念な準備をして待機していた。

そこに顔見知りの門番がやってきて、イリアから連絡が入っていることを伝えた。既に控え室の設置された通信機に繋がっているらしく、受話器を取るとイリアの声が聞こえてきた。

「依頼の前にゴメンね」

「大丈夫だよ、お姉ちゃん。まだ出発まで時間あるし」

出発の時間まではまだ三十分もある。パーティのメンバーも思い思いに装備の確認や、柔軟などして時間を潰していた。

「それでどうしたの？」

「ん……それが、ね」

いつもの姉にしては歯切れの悪い話し方に、ミレットは疑問に思った。

「何かあった？」

「何かあったって程じゃないんだけど、ミレットにお願いしたいことがあって……」

話を聞くと、オウカというギルドに登録しに来た青年が結構な曲者で、それでいて何だかこちらの母性をくすぐるのだとか——何だか本当にいつもの姉らしくないなと思いながらミレットは、今もどこか楽しそうに愚痴っているイリアの話に割り込んだ。

「つまり、わたしにそのオウカって人の監督官をやって欲しいってこと？」

「……結果からいうとそうなるわね」

「いいよ。お姉ちゃんからの頼みだし、断るわけないよ」

「ありがとう！」

「で、いつからやるの」

「……今日は無理かな？」

「え、今日！？ 無理だよ、これから依頼があるって分かってるでしょっ」

「そうよね、でもオウカのことだから一日放っておいたら何か仕出かしそうで」

ミレットの頭の中でオウカという青年の姿はかなり最悪なものになりつつあったが、そこは実際に会ってみないと判断できないと考えるのもミレットという人柄でこそだった。

そして家族以外でイリアが人を呼び捨てにするなんて初めてのことじゃないだろうか。

個人的にも会いたくなかったミレットは姉に一度断りをいれる。

「とりあえず、仲間にも聞いてみるから少し待ってて」

「うん、ごめんね」

ミレットが受話器を押さえて振り返ると、会話から大体の事情を把握したのだらうリーダーのケビンが軽く肩を竦めて、

「急ぎの用なんだろ？ 今回の依頼は危険じゃないし、イリアさんからのお願いを優先してもいいんじゃないかな」

周りの仲間を見て言った。

彼らもリーダーと同じ意見らしく、問題ないとジェスチャーで返してくれた。

「ありがとう」

早速、ミレットは待たせていた姉に了承の旨を伝えたと、向こうもほっとしたようで「これから門に向かわせるから」と言って通話は切れた。

その後、オウカに会って姉が言っている姿とは印象が違うと思っていたが、話しているうちにミレットは姉の言つとおりだと実感した。

いい意味でも悪い意味でもオウカはマイペースなのだ、とミレッ

トが結論を心の中で出すと同時にオウカの瞳が開いた。

一瞬ミレットはどきとしたが、そんな動揺を知らないオウカは次の言葉を告げた。

「……少し、急いだ方がいいな」

第二話 封印区域（後書き）

初めまして。水々火々と申します。

若輩者ではありますが、今回初めての投稿をさせていただきます。

稚拙な文章ではございますが、皆様これから宜しくお願い致します。

私の仕事柄、大変申し訳ないのですが更新にムラがございますので、ここで先に謝罪をさせていただきます。

ここまで読んでいただき、誠にありがとうございます。

近々、更新できればと思いますので宜しくお願い致します。

第三話 魔物の群れ（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

第三話 魔物の群れ

オウカとミレットの二人は森の中を走っていた。

封印区域の森の木々はそのサイズも歪だが、その生え方も人の侵入を拒むように入り組んだものだった。

決して常人ではまともに歩くことすら覚束無いだろう中を、二人は苦もなく疾走している。

今から十分ほど前に、魔物の気配を探すために瞳を閉じて集中していたオウカだったが、少しして瞳を開いた。

そして直ぐにオウカは真剣な表情で、

「離れた場所で人が魔物に襲われている」と言うミレットの指示を仰いだ。

もちろんミレットは人を助けるためであれば、行動することに躊躇しない。だが、オウカという開拓者でもない人間を戦闘に巻き込んでいいものか悩んでしまう。

オウカに場所だけ聞いても、もし万が一、ミレットがそこに着くことが出来なければ人が死んでしまう。

決断する必要がある。……そして、ミレットは決断した。

「案内して」

オウカは頷くと、着いて来いとばかりに背中を向けて森に入った。現在、森に突入してからミレットは目の前のオウカに驚愕を重ねていた。

ミレットはオウカの後ろを着いて行くだけだから大丈夫だが、先頭を走るオウカはまるで先導する道があるように迷いなく進み続けている。

ミレットの見立てでは、オウカはある程度の、それこそ開拓者になる実力は持っていると思っていた。筋肉のつき具合や、開拓者と同じペースで歩いて微塵も疲れを感じさせないところからもそれを裏付ける要因となっていた。

だが、その評価も改めねばならないようだ。ミレットはオウカの遠い背中を見つめた。

オウカは後ろにミレットが着いて来ているのを、後を見ずとも感じていた。

ミレットをなるべく離さないように、それでいて今も襲われている人たちを救えるギリギリの速度でオウカは走っていた。

しかし、気配を感じる限り、このままでは間に合わない。

オウカは左右の腰に帯剣した二振りの剣を抜くと、後続のミレットへの目印として左右に広がる木々を斬り倒さないように調節しながら斬り傷を刻み、全速で駆け抜けた。

オウカが森を抜けると、そこには多数の魔物に襲われているギルドのパーティがいた。

既に何人かは重傷のようで、それを庇うように前衛タイプの開拓者が二人と、『炎』のギフトを使う後衛が一人応戦している。

三人とも決して軽傷ではすまない傷を負っており、全滅も時間の問題だ。

この襲われている開拓者たちというのが、実はミレットの所属するパーティであり、彼らのような実力者が揃っていても苦戦する魔物の群れに、新たにオウカ一人が参戦したところで何の意味を成さないように思える。

魔物は熊のような体躯で、立ち上がった状態では全長四、五メートルにも及ぶ。また、全身を覆うように茨の棘が生えており、鋭くて長い爪と牙が血で濡れている。

ギルドではシンフルベアと呼ばれる封印区域の奥地、つまりは『種』の近くに生息する魔物だと確認されている。その凶暴性と黒くて分厚い毛皮に守られた体躯は並みの攻撃では掠り傷すら付かないため、開拓者の中でも指折りの実力者でしか相手に出来ない存在だったが、開拓者にもまだなっていないオウカは知る由もない。

シンフルベアは十七匹。普通この数で攻められれば、いくら経験の豊富な開拓者であろうとも死を意識するしかない。

オウカは魔物の数だけを確認すると、再び風となつて魔物の群れへ突入した。

「動くなッ！！！」

言霊に気を籠めて、オウカは一喝した。

対象となつたのは苦戦していた開拓者の三人と、周りを囲んでいた十七匹のシンフルベア。全てが金縛りにあつたように動けない中、オウカは両者が対立する中間に立った。

開拓者にとつては突然表れた正体不明の青年。シンフルベアにとつては好都合にも増えた獲物。

どちらが早く動きを再開するかは、火を見るよりも明らかだった。シンフルベアは大きく唸つて忌々しい金縛りを解き、目の前にいるオウカへと鋭くて長い爪を振り上げ、勢いよく下ろした。

鈍い音と共に、舞い上がる土煙と鮮血。

——死んだ。

今の出来事を見ていた者たち全てがそう思った。オウカの後ろで固まっていた開拓者たちと、やっとの思いで森を抜けたミレットが呆然とした様子で口には手を当てていた。

「グルアアアアアアアアアッ！！！」

シンフルベアは雄叫びを上げながら、振り下ろした爪を引き抜こうとして自分の腕から先が無いことに気づく。

「ガアアアアアアアアアッ！！！」

今度は絶叫。それも痛みに伴う、耐え難い絶叫。

視界を遮っていた土煙が薄れると、そこには死んだと思われていたオウカが先程と変わらずそこに立っていた。先程と違う点といえば、切断されたシンフルベアの腕が地面に投げ出されていることか。オウカは先程の攻撃を受けても泰然としており、どこか余裕すら

感じさせる。

「うそ……」

ミレットはオウカが死んでいなかったことへの喜びと、あのシンフルベアの腕を切り落とす離れ業を本当に彼がやったのか信じられずにいた。

その声が聞こえたわけではないだろうが、ミレットはオウカがこちらを見たような気がした。

シンフルベアの群れも同族が攻撃されたことに気づいたのか、それぞれが威嚇などを行い、オウカに敵意を示す。その中に隻腕になった魔物もあり、痛みよりも憎悪が勝ったのか、より凶暴に咆哮を上げる。

「へえ、今ので戦意を失わないのは中々だな」

膨大な敵意のプレッシャーは物理的な塊となって襲い掛かるのだが、当の本人は微風を浴びるように心地よく感じながら相手を褒めた。

一瞬の内に心を歪んだ状態になると、オウカは両手に持った剣を下段に構えながらシンフルベアの群れに流れるように歩み寄った。

近づくオウカに隻腕になったシンフルベアは、残った方の腕で迎え撃つ。先の攻撃よりも爪を広げてより確実に獲物を狙うが、シンフルベアの一撃は空を裂くのみで手応えは無い。

トンと、何かが背後に降り立つ音を聞いてシンフルベアは振り返ろうとしたところで――紅い花卉にも似た鮮血を全身から噴き出して、絶命した。

誰もが何が起こったか理解できずにいた。それは共通の認識で、開拓者も魔物も動きを止めるには十分な出来事であった。

オウカは後ろを気にせず、残りのシンフルベアの群れへ向かう。

今度は三匹のシンフルベアが動こうとしたところで、オウカの両手が霞んだ。咲き乱れる三つの紅くて瑞々しい花々。醜悪から生まれた美ゆえに散るのも早く、微かな結晶となって消え去る。まさに鎧袖一触の出来事だった。

残る敵は十三匹。

「彼は、一体誰なんだ……」

今までこのシンフルベアの群れに全滅寸前まで苦しめられたパーティのリーダーであるケ빈は、少なくとも傷の痛みも忘れて呟いた。

決して答えが返ってくることを期待して言ったわけではなかったが、予想外にも知った声で答える者がいた。

「彼は、オウカ。オウカ・ライゼスです」

ケ빈は声の方を振り向くと、予想どおりミレットがそこにいた。ミレットもオウカが応戦している間に仲間の存在に気づき、シンフルベアに気付かれないように注意しながらここまで来たのだった。素早くパーティメンバーの容態を確認すると、ミレットは重傷者から応急手当を始めた。開拓者の大半は携帯している持ち運び優先の救命道具セットと各人の衣類などを使い、即席の止血と骨折には添え木を当てて体を固定する。

「ミレット、君は何故ここに？ いや、それよりもオウカ・ライゼス……聞いたことのない名だ」

「そうだと思います。オウカは、開拓者ではないですから」

「……何だって？」

「彼は開拓者でなく、なるために私と一緒に試験を受けるはずでした」

ケ빈が絶句するのも仕方が無い。他の人よりもオウカという人間を知っているミレットでさえ、動揺を隠すことが出来ないのだから。

しかし、彼女の手が止まることは無く、着実に手当てを行っていく。このオウカが作ってくれたアドバンテージを使わずにいることは、ミレットにとって罪にも等しい。

それだけ、この戦闘は一方的であった。目の前では早くもシンフ

ルベアの数残り六匹まで削られている。

まるで夢幻を見ているようだ。オウ力が魔物の群れに向かって歩くだけで、そこに紅い血の花が咲き、そして結晶となっていく。

有り得ない。通常では、有り得るはずが無い。それでも、現実として今起きていることは認めるしかない。

「本当に、彼は何者なんだ？」

ケ빈は再度同じような問いを口にするが、明確な答えを求めて言っただけではないことが分かるだけに、ミレットは心に浮かんだままいつものように答えた。

「分からないけど、わたし達の味方ですよ」

オウ力は最後の一匹となったシンフルベアを見据えた。

この群れのボスと思われるシンフルベアの体軀は他に比べて一回り大きく、全身を覆う茨の棘もより禍々しく、かなりの強敵だと思われる。

それでもオウ力が気負うことはなかったが、懸念していることが一つだけあった。

ミレットが負傷した開拓者たちと合流したことは戦闘中でも把握していた。

彼女も開拓者の一人であるからにはこういった状況に巻き込まれることもあるだろうが、オウ力としてはあまり血生臭い光景を見て欲しくなかったのだ。

特に現状のオウ力の剣技は疾風怒濤といった言葉に相応しいものが多いため、本来であればこれだけの戦闘である。周りは屍山血河となり、見るも無残な光景が広がっているはずだったが、魔物の特性上倒されたものは結晶となるため、それも杞憂となった。

最後の敵ということもあり相手の力量を測るため、オウ力は牽制程度の意味で斬撃を放つ。

ギギギンツ——

三つに重なった耳障りな音が、オウカの攻撃をシンフルベアが防いだことを示していた。その巨大な体躯に似合わず、かなりの素早さも兼ね備えているようだ。

「今を防ぐか。だったら、少し本気を出さなきゃな」

オウカは今まで抑えていた枷を一つ開放した。静から動へ身体がシフトする。

ギフトの『俊敏』を活用したオウカはこれまでの流麗な動きと異なり、雷にも似た動きでシンフルベアに接近する。

相手もそれに合わせて、触れただけで致命傷になり得る一撃を見舞う。

ギイイインツ――

二度目の刃合わせでお互いに有効な一撃が加えられなかったことを確認すると、矢継ぎ早に連続の攻防へと至る。

オウカが雷速で挑むのに対して、シンフルベアは持ち前の強靱な肉体と時には身体に生えた棘をも使って相手を貫こうとする。

常人はおろか、ここにいる開拓者の大半でさえもがこの攻防を追えずにいた。

それほどまでに凄まじい戦闘。先の戦いではまだオウカは足を使わずにいただけあつて目で追うこともできたが、ここまで来ると最早誰も手出しのできない状態になる。

現に応急処置を終えたミレットとケ빈は先程から開いた口が塞がらないようで、呆然と事の成り行きを見守っている。

ギインギギイギイイイン――

度重なる攻防の果て、オウカはシンフルベアとの間に距離を取る。距離は十メートル。今のオウカにとって一足で縮められる距離でもある。

「……そろそろ決着をつけるか」

全ての出来事に始まりがあるように、終わりもまた存在する。

個人的にはまだこの魔物と戦いたいという想いがあるのは確かだが、後ろの開拓者たちの状態から見て、時間もあまりないはずだ。

不幸中の幸いにもミレットが彼らに応急処置を施してくれたから安心して戦うこともできたが、これ以上はただの自己満足に過ぎない（身体は十分に温まった。後はこの魔物を最短で刈り獲るのみ）

オウ力はそれまでと同じように雷速でシンフルベアに接近する。

そして、目の前に豪速で迫る爪を確認し微笑んだ。

ゴッ——

幾度も繰る返された刃合わせが鳴らない。鳴るのはただ空を引き裂く音のみ。

戸惑いを浮かべるシンフルベアの懷に、オウ力は立っていた。

離れた場所で見えていたからこそ、ミレットには今のオウ力の動きが把握できた。

それまでの異常な速さではなく、ここにきてオウ力は緩急の妙を使い分けたのだ。その速さに慣れてしまっていたシンフルベアには理解できなかったであろう。

豪速で迫る一撃に怯むことも無く、オウ力は雷速を解き、柳のような動きでそれを避けてシンフルベアの死角へと移動した。つまり、シンフルベアの懷である。

灯台下暗しとはよく言ったもので、戸惑いを浮かべるシンフルベアはオウ力に気づけずに初めての隙を見せてしまう。

茫然と立ち竦む巨体の足元からその連撃は始まった。まずは脛に致命的な一撃を喰らったのか、前のめりに体勢の崩れるシンフルベアに対してオウ力は休むことなく、超高速の斬撃を更に加速して斬り刻む。

あまりの剣速と止むことの無い下からの攻撃に二トン近くあるシンフルベアの身体が地上から離れる。完全に無防備となった瞬間を狙って、オウ力は両手に持つ剣を全身の捻りを加えて心臓に突き立てた。

ドンッ――

有り得ないという言葉が何度頭に浮かんだらう。ミレットは空高く舞い上がったシンフルベアを見上げ、最後の一撃の構えを取ったままのオウカに畏怖の感情と場違いながらも戦士として完成された美しさを感じていた。

十メートルほど舞い上がったシンフルベアの巨体は、そのまま黒煙を上げて結晶となって落下した。他の結晶とは異なって一回り大きく、禍々しくも艶のある漆黒の球体は吸い込まれるようにオウカの手元へと収まった。

パーティを襲っていたシンフルベアの群れがもういないことを確認したミレットは、今まで張り詰めていた緊張の糸が解れたような気がした。しかし、いつまでも安心してはいられない。応急処置をしたとはいえ、仲間の容態は刻一刻を争う事態であることに変わりはない。それに先程まで意識のあった三人も既に他の仲間と同じく意識の無い状態になっている。

ミレットの所属するパーティは六人で構成されており、ミレットとオウカの二人で運ぶには数が多すぎる。

どうしたらいいのかミレットが悩んでいると剣を鞘に収めたオウカが近づいてきた。彼もこちらの現状を見て、時間があまりないことを悟ったようだ。

「オウカ、どうしよう……どうしたらいいの？」

ミレットは言うてから悔やんだ。さすがのオウカもこの人数を運ぶ手段を持っているはずはないだろう。もしあるにしても、重傷者に負担を与えずに移動するのは不可能だ。

全てをオウカに頼り切るのは虫が良すぎる。

「誰かこの中に式神か、もしくは『使役』のギフトを持っている人は？」

悲壮な表情のミレットに、オウカは優しく問いかけた。

「え？ 『使役』ならわたしが持つてるけど」

ミレットの所有するギフトは『解析』『衝撃』そして『使役』の三つ。だが、『使役』とは能力者に比べて遥かに弱い魔物や動物を一時的に拘束し、操るギフトである。しかも、その効果は対象が生きているときに限られるもので、この周囲にはシンフルベアの群れを恐れて他の魔物は逃げてしまったはずだ。

「それなら一つ方法がある。俺を信じてくれないか？」

オウカの目は真剣で、彼が言うようにこの場を解決できる方法があるのなら信じたい。

ミレットは縋る思いで確認した。

「それでみんなが助かるなら。

わたしは何をすればいいの？」

「ミレットの『使役』を使って、ここにいる人たちを魔物で移動させる」

「でも、この周囲には魔物はいないのよっ。それにこれだけの人数を運べる魔物なんて、わたしには……」

「大丈夫だ。それについては俺に考えがあるから、少し待っててくれ」

オウカはそう言うと、少し離れた位置に聳え立っている巨木へと一足飛びで駆け抜けた。そしてその勢いを乗せたまま腰に差した剣を抜き、強烈な一閃を放った。

幹の根元から斜めに切断された巨木は、ゆっくりとオウカの方へ傾きだした。彼は木が倒れてくるのを確認すると、今度は左右の剣を使って不要な部分を斬り分ける。

見る見るうちにそのサイズは小さくなっていき、最後には高さ二メートルくらいの円柱となって地面にそつと降り立った。

また不要となった大量の木材は、ご丁寧に切り揃えてその脇に並べているからミレットとしては何ともいえない気持ちになる。

あれだけ規格外のオウカが大丈夫だと言っただから、自分も気負わずにやれることをやればいいのだと思うと心が軽くなるのを感じた。

オウカは二メートルはある円柱を軽々と肩に担いで、再び一足飛びでこちらに戻ってきた。

「それをどうするの？」

「式神を顕現させるための依り代にする」

ミレットがオウカの言ったことを理解できずにいると、オウカは百聞は一見にしかずとばかりに円柱を縦に置いてその上に飛び乗った。

カコつと、何かが填まる音がすると同時にオウカから膨大な量の生命力が溢れ出し、それを一点に流し込むのをミレットは黙って見守った。

変化は唐突に起こった。オウカの立っている場所から黒煙が流れ出して円柱を覆うと、徐々にその輪郭が形成されゆき、信じられないものに変貌したのだった。

それはミレットたちの仲間を散々苦しめたシンフルベアに他ならなかった。

「オ、オウカ……あなた一体何を」

「こいつは式神で、魔物とは違うから心配いらない。その証拠に棘とか、敵意とかないだろ？」

オウカはシンフルベアらしき式神の肩に乗って、ミレットに問題がないことを示した。

確かにシンフルベアの特長ともいえる茨の棘が生えていない。それに禍々しさは消え、どこか神々しささえ感じるような気がする。

「それにしても、これをどうやって？」

「それは後で説明する。時間がないんだろ？」

オウカの言葉にミレットも気を引き締める。

「……」

「正直なところ、俺にはこいつを顕現させるだけで精一杯だ。だか

らミレット、君がこいつを『使役』してくれ」

言いたいことも聞きたいことも山のようにあるが、時間がないのは確かだ。

「やってみる」

ミレットは式神に触れ、意識の経路を繋げる。

通常は魔物に『使役』を使うと必ずと言っていいほど強い抵抗を受けるが、今回はそんなことはなく、すんなりと自分と式神に経路が通ったことを感じた。

（四肢を地面に着けて、身を伏せて）

ミレットが指示すると式神はそれとおりに行動した。

「無事『使役』できたみたいだな。では、急いで彼らをこいつの背中に運ぶぞ」

二人は慎重に式神の広い背中に仲間を乗せ、移動する際の振動で落ちないようにそれぞれを負担にならない程度に固定する。

「オウカ、次はどうするの？」

「ミレットはこれから言う二つのことに集中して『使役』を使ってほしい。

一つは振動を与えずに移動させること。もう一つは門まで最短距離で進むように指示すること」

「分かった」

ミレットには目の前のオウカを信じるしかない。その彼が言うことだ。ミレットは全力で式神を『使役』した。

（お願い、揺らさずに、門まで真っ直ぐ最短距離で進んで。みんなを助きたいのっ！）

指示を受けた式神は、ミレットの望むままに己のでき得る最善の方法で門へと向かう。

伏せた姿勢から四肢を伸ばし、ミレットの指示通りに式神は滑るように大地を蹴って直進した。

まったく揺れないことにも驚いたミレットだったが、次第に近づいてくる森の木々に式神が自分の指示を理解できなかったのか不安

になった。

「集中を切らすな。そのまま信じて『使役』するんだ」
オウカの言葉にミレットは再度集中して『使役』する。

（お願いっ——）

木々はもう目の前だが、それでもミレットは願ひ続けた。
式神が木々にぶつかる瞬間、それを避けるように木々の方が左右
へと退き、道を開ける。

不思議な光景にミレットが目を瞬かせていると、隣に座っていた
オウカが微笑んで言った。

「気にはなるだろうが、後でまとめて説明してやるから今は集中だ」
「絶対よ？　嘘ついたら、本気で怒るからね？」

言葉とは裏腹に、ミレットは輝くような笑顔で応えた。

第四話 慌しい一日の終わり（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

第四話 慌しい一日の終わり

日も暮れて、それぞれの家屋に明かりが灯る時間帯の出来事である。

「主よ、これは美味しいぞ。シィーアもたくさん食べるから主も食べるがよい」

「ああ、ありがと……って、取ってはくれないんだな」

「それならわたしが取るっか？」

「あ、コラっ。何で私のお皿から取るうとするのよつ。中央にちゃんとおるでしょ」

謎の少女にオウカ、ミレット、そしてイリアの四人は、フォウント邸にて夕飯時には騒々しい光景を繰り広げていた。

オウカを含め、全員が昼時とは違う私服姿で、それぞれの個性が表れている。

もっとも、オウカの服装は変わったといっても昼の服装と系統がまったく変わらないことから、彼は服に関して無頓着のようだ。

そんなオウカはさて置き、女性陣はというと――

ミレットは動きやすさを重視したグリーンのタンクトップの上に大きめの白のシャツと、デニムのショートパンツ。開拓者として臨むときには分からなかったが、この軽装で圧迫されていた胸はその本来の大きさに落ち着いている。

正直のところオウカには目の毒であるが、戦闘時と同じく明鏡止水の心で迎え撃つ。

イリアは性格どおり落ち着いたモカ色のワンピースの上に、ライトブラウンのカーディガン。彼女もギルドで会ったときに気づいてはいたが、今は私服ということもあり、平均よりも豊かな胸を束縛するものは少ない。

これもオウカは明鏡止水の境地で受け流す。

そして謎の少女は足首近くまである烏の濡れ羽色の真っ直ぐな髪

に漆黒の瞳、肌は雪のように白くてまるで異国の美しい人形かと思えるほどだ。背丈は一四〇くらいで線の細い体つきをしており、その幼さがより一層少女の人間らしさを薄れさせている。

服装に関しては少しサイズが合っていないのか、その華奢な身体には大きすぎる黒のワンピースを、腕や腰の位置で太目の紐を使って補整している。

彼女に関してオウ力は普通に対応できる自信がある。その理由は言わぬが花であろう。

視線をフオウント姉妹に戻すと、ミレットがイリアの皿からオカズを取ろうと攻めており、それをイリアは防衛している。

姉妹というものは遠慮をしないものであるらしく、まずはミレットが火蓋を切った。

「いいじゃんか、お姉ちゃんのケチ」

「ケ、ケチですって？」

薄っすらとイリアのこめかみに青筋が浮かぶのを、オウ力は傍観者然として見ていた。

「そうだよ、お姉ちゃんは事務職なんだから栄養管理には気をつけないと、その内……」

「ミレット！ 言っていいことと悪いことがあるって知ってる！？ それにこれ作ったの私だから栄養管理もバッチリで、低カロリーーなんだから安心なのよっ」

「……やっぱ気にしてんじゃん」

「……」

姉妹の仲睦まじい（？）やり取りを見ながら、オウ力は隣でひたすら食べている少女に声をかけた。

「それにしてもよく食べるよな。お前のその小さい身体にどうやって入っているんだか」

「もおべあばあべもびびば」

「あーもう、口の中に入ってる時に喋るなよ」

オウ力は手元にあったテーブルナプキンで、少女の口を拭い、周

りに飛んだ食べかすを拾う。

少女はゴックンと口の中の物を飲み込むと、

「それは乙女の秘密だ」

胸を張って偉そうに言った。

「乙女の秘密、かあ……」

「そうだ。だから主よ、詮索してはダメだぞ？ もししたら、明日の朝日を拝めないかもしれないぞ？」

「それは大変だな。でもよく噛んで食べるんだぞ？」

「分かった。シィアにとって造作もないことよ」

「あと、きちんとフォークとナイフ、もしくは箸を使って食べるんだぞ？」

「それは主よ、いくら万能に見えるシィアでも不可能なものは存在するのだ。察してくれ」

「ダメだ、ちゃんと使え。でなきゃ、飯は抜きだ」

「むう……仕方ないのう、了承しよう。しかし、今まで使ったこともないから上手く使えぬし、主が教えてくれぬか？」

「ほんととお前アレなんだな。いいか？ これはこう使うんだ」

傍から見ると仲のいい兄妹に見えなくもないやり取りに、いつの間にか周囲は静まり返っていた。

無言のプレッシャーを放つ方向をオウ力が確認すると、ミレットとイリアが難しい顔をしてこちらを見ていた。

「どうした？」

意を決したのかミレットが口にする。

「いや、今日会ったにしては何か親しすぎない？」

「そうか？ ミレットやイリアとも今日が初めてだろ？ 接し方は変わらないと思うけどな」

「いえ、そうではなく。何というか、その、距離が近いというか……面倒見が良すぎるというか……」

今度はイリアがオウ力の言葉に反論を挙げる。

「それは仕方ないだろ。こいつは色々と分からないことが多いんだ

し」

箸の使い方で四苦八苦している少女の頭を、オウカはポンッと軽く叩く。

それを再びジツと見ていた二人はお互いに頷いて、意見を交換し合う。

「お姉ちゃん、アレをどう思う？」

「考えたくはないけど、可能性はあるわね」

そんな姉妹を気にせず、苦戦している少女にオウカが正しい箸の持ち方を教えていると慎重な様子でミレットは尋ねた。

「あの…… オウカって幼女趣味があつたりする？」

「……はあ！？ 今何って言ったっ？」

これに対してオウカは冷静を保つことができずに、大声で聞き返してしまう。

「だって、シィーアの手を握っているし」

「これはこいつが箸の使い方とか、人として一般的なことが分かっていないからで、好きでやってるわけじゃないっ」

「そうなのか？ シィーアのこと、嫌い、なのか？」

オウカの隣にいる伏兵が、少し涙目でこちらを見上げてくる。

「ちよつと待て！ 別に俺はお前のことが嫌いだとは」

「やつぱりそうなんですネ！？ まさかとは思いましたが、信じたくはありませんでしたが、ギルドでもシィーアちゃんのことを見て鼻血出しましたし！！」

「あれは不可抗力だ！ 突然、目の前にあんな状態の女がいれば誰だってそうなるだろ！？」

「なるほど、主は照れ屋さんなのだな。然らば、耐性を付けるためにももう一度シィーアが」

「だあああああああああああつ！ 誰でもいいから、俺の話を聞けええええええええええっ！！」

本当に、本当に騒がしい夕食時の光景である。

何故こういったことになっているかというと、時間は三時間前に

遡る。

「その魔物使い動くなッ！ 名前と所属を言えッ！」

オウカたちが門に辿り着いたところで、門番の鋭い声が響いた。他にも何人かの門番が武装して、こちらへ武器を向けている。

無理もないだろう。突然森の中を通り貫けて巨大なシンフルベアに似た魔物が現れたのである。彼らの警戒レベルは最高潮に達しているはずだ。

「ミレット・フオウント！ ケビン率いるパーティに所属しています！」

ミレットは門番に顔が見えるように、式神から身体を乗り出して答える。その声と名前に聞き覚えのある者たちが動揺する気配を感じる。

「ミ、ミレットなのか？ どうしてそんな魔物を『使役』しているんだ？」

「それは後で報告しますから、今はここを通して下さい！」

仲間が魔物に襲われて重傷を負ってるので、早くギルドの医療機関に運ばないといけないんです！」

ミレットの話を聞いた門番の数名は警戒しながらも式神に近づいて確認すると、その上に乗った満身創痕のパーティメンバーに息を呑んだ。

「分かった、門を開けよう。待っててくれ」

門番はそう言うとともに、門内にいる仲間に門と防壁を開放するように指示した。

「ありがとう」

ミレットは感謝の言葉を言うと、式神を『使役』してその門へと入った。式神は振動の少ない滑るような移動で走る。

「話が分かるやつでよかったな」

式神の顕現を維持するのは相当に疲れるものなのか、オウカは少し疲れた声でミレットに声をかけた。

「ええ、本当に。でも、医療機関に行くまでは安心できないから……」。

「ごめんね、オウカ」

「何が？」

「これを維持するのって、凄く体力使うんでしょ？ 本当だったら、能力者のわたしがその負担を受けるはずなのに……」

落ち込むミレットにオウカは長い溜め息をついた。

「アホかお前は」

「ア、アホですってッ!？」

「ああ、そうだ。適材適所って言葉があるだろ？ 今回の俺の役割はこいつを維持すること。そしてミレットの役割は、こいつを『使役』し、安全かつ迅速に彼らを医療機関まで送り届けること。何の問題もないじゃないか」

「……ありがとう」

オウカから顔を逸らしたミレットは、小さな声で感謝の言葉を言った。

その表情は顔を逸らしているためオウカには見えなかったが、淡い栗色の髪から覗く耳が赤く染まっていた。

式神が門を抜ける手前で、オウカはミレットに疑問を提示した。

「そういえば、こいつを都市に入れても大丈夫なのか？」

「……………え？」

顔色が赤から青、そして真っ白になったミレットは悲痛な叫びを上げる。

「オウカのバカッ！ 何でもっと早く言ってくれないのよー!!」

ミレットの感情を他所に式神は門を通り抜ける。次に来るのは人々の悲鳴だろうと、ミレットは目を瞑って待ち構えていた。

「ホントこの都市のレベルは高いんだな」

予想とは別にオウカの感心する声で、ミレットは恐る恐る目を開ける。

「……あ、そうか。防壁を開けるからには、都市のほうにも警戒用の知らせが入るに決まってるじゃない」

走る式神の周りには人っ子一人存在せず、まるでこの都市に誰も住んでいないような感覚になる。

通常、門のメイン通路を封鎖する防壁を開放する機会はない。あるとすれば、この世界では数台しかないといわれるロストテクノロジーを使用した武装型輸送車の出入りか、封印区域で何かが起こったときぐらいである。そのときの緊急マニュアルは存在し、この都市に住むものにとって絶対に守らなければならないルールの一つとして認知されている。

余談だが、もちろん都市の移動には乗り物を使うこともある。基本は馬車か、能力者によって『使役』された魔物の大型輸送車くらいしかない。武装型輸送車に関しても、製造や維持費に膨大な費用がかかるため、大都市と呼べる場所でしか所有されていないのが事実だ。もつとも、商業都市ブルドオムスでも所有はされているが、ここ数十年稼働されたことがないことから無用の長物として倉庫に眠っている。

移動する景色と無人の商店街をオウカが物珍しそうに見ているのを見て、ミレットはくすつと笑った。

「もう、オウカが変なこと言うから焦ったじゃない」

「すまん。だけど、ここまで徹底的に街から人がいなくなるなんて凄いな」

「まあ、月に一度は避難訓練もやっているから、これくらいはできないとね。」

できない人から真つ先に死ぬ可能性が高くなるわけだし」

そういうものか、とオウカは自分の住んでいた場所と比べる。確かにこれまでオウカのいた場所でも、避難訓練などの組織的な行動を行ったことはある。しかし、ここまで皆が真剣に取り組んでいたかという点、答えは否となる。それだけ、この都市の人々には封印区域という危険と隣り合わせでも住むなりの理由と、生存意識を高く持っているということだろう。

「何はともあれ、これだけ道がひらけていることは幸運よ。急いでギルドに向かいましょ」

「そうだな。もし揺れても俺が彼らを支えるから、よろしく頼む」
決して遅くはない速度で走っていた式神はミレットの『使役』を重ねて受け、大地を駆ける黒い風となるが、その術者の気持ちを慮ったのか揺れることはなかった。

目的地であるギルドには式神のお陰もあり、それから五分ほどで着いた。

ギルドの前では十一人の白衣を着た者と、護衛のためか開拓者らしき重装備を固めた五人のパーティがいた。皆がオウカたちを待っていたようで、シンフルベアに似た式神を見たときにはさすがに驚いていたが、彼らもプロである。

「門番から既に患者の人数について連絡はもらっている。後は我々に任せてくれ」

白衣を着た一人の男はそう言うと、周りの医師たちに的確な指示を出しながら、重傷者であるミレットの仲間たちをストレッチャーに乗せてギルド内へ運ぶ。

それについて行こうとしたミレットだったが、上背のある屈強な開拓者に呼び止められた。髪は短く刈り上げており、歴戦の者特有の雰囲気滲ませていた。

「フオウント、すまないが何が起こったのか事情を聞かせてもおう」
「でも、今はッ」

ミレットは離れていく仲間たちの方を気にしながら拒絶しようとするが、男は厳しい顔で首を左右に振る。

「それも理解している。だから後日、君の仲間が話せるようになってから一緒に事情を聞かせてもらおう。」

「そこのお前もそれでいいか？」

ミレットたちは少し離れた位置で立っていたオウカに男は声をかける。

「へえ、何故俺も？」

「お前も当事者の一人だからだ」

男の答えは簡潔で、オウカはその回りくどさない言い方が気に入った。

「分かった。俺はオウカ・ライゼス。ギルドを通してもらえば連絡が取れると思う」

「協力に感謝する。私はゴルディエス・ハーグラン。この都市の警備隊隊長を務めている」

用事は済ませたとばかりにハーグランはオウカたちに背を向け、ギルドの中へ入っていった。それに続く四人の開拓者たちも只者でない風格を漂わせていた。

「隊長、ミレットへの尋問を先延ばしにしてよろしかったのですか？」

ハーグランたちがギルド内部の職員用通路を歩いていると、五人の中で一番若い女性隊員がハーグランに先程のことを確認した。

「ガーネット、君は気付かなかったのか？」

「一体何をでしょうか？」

ガーネットは、ハーグランの含む言い方に更に疑問を重ねる。

「まあーだまだだな！ ガーネットの嬢ちゃん！」

「ササトさん、私を嬢ちゃんと呼ばないで下さい。」

それで何がまだまだなんですか？」

ササトと呼ばれた黒色の肌をした三十代の男性隊員は、白い歯を
にかつと見せて答えた。

「ホント、クールな女だねえ。ま、後輩に教えるのも先人の務めつ
てな。」

まあ、簡単にいうとライゼスって名乗ったガキな。俺らの隊長に
殺気を飛ばしてたんだよ」

「なッ！？」

知らなかったとはいえ、あまりにも不穏な内容にガーネットは驚
愕した。

「あの男ッ！ 今すぐにでもッ」

「おおいおいおい、落ち着けて。話の続きがあるんだからよう」

激情に任せガーネットがオウカの元へ走り出そうとするのを、サ
サトは独特の口調で止める。

ガーネットはハーグランの方を見るが、彼はいつもと変わらず厭
しい顔をしていた。

「でえ、そのガキが殺気を放ったことに関して気付いていないのは、
あの中でいうとお前えさんとミレットの嬢ちゃんぐらいだな」

眉間に皺を寄せる彼女を流して、ササトは続ける。

「その後は俺らも警戒してたんだが、あのガキって結構面白いのな。
隊長の話を聞いてからパッと殺気を消して普通に話してたし、あ
りや中々出来るな」

周りの隊員の評価も大体同じようで、オウカ・ライゼスという個
人に興味を持ったようだ。

「しかし、隊長はそれでいいのですか？」

「こちらにとって不利益なことは何もない。それに門の方にも何か
あつたらすぐに連絡しろと伝えてある」

「……了解しました」

不承不承であることは間違いないが、ガーネットはハーグランの
意見に従った。

「あと、非常事態の解除を頼む」

「了解しました」

離れていくガーネットを見ながら、彼は先程のことを思い出す。

（オウカ・ライゼス、面白い男だ）

ハーグランは近いうちに会うであろう日を思い、静かに微笑むのだった。

その後、仲間の容態を見に行くミレットと別れることになったオウカは式神の顕現を解除し、残った木の円柱をギルドの出入り口の脇に立てかけると中に入った。

ギルド内部は先の非常事態という知らせで少し前まで騒然としていたのか、主に開拓者たちが武装したまま、今回の警報について話合っている。

彼らの話の大半は憶測に過ぎないが、負傷した開拓者たちがストレッチャーで運ばれるのを見た後である。笑い話では済まないことが起きたのだと理解し、それに向けた今後について検討をしているようだった。

オウカはその中を悠々と歩き、目的の人物を見つけた。

「何だか忙しそうだな」

書類を抱えて、何やら職員と慌しく連絡を取り合っていたイリアは声に反応して振り返るとオウカに駆け寄った。

「オウカ！ 無事だったんですね！」

「俺は問題ないがどうした？」

「今はもう落ち着いてきてますが、門から警報が鳴ったときはこも騒然としていたんですよ。」

聞いた話によるとミレットが負傷者を運ぶため大型の魔物を『使役』していたとか、そのためにメイン通路の防壁を開放することになったとか色々情報が錯綜していて……って、オウカはミレットと一緒にいたんですね？」

こちらから聞くまでもなく、イリアはオウカに矢継ぎ早に説明し

た。よほどミレットのことが心配だったに違いない。

「さつきミレットと分かれたが、それまでは一緒にいたな」

「ということは、あれは間違いだったのかし、ら……」

何かに気付いたようにオウ力を凝視するイリアに、彼は訝しげに確認する。

「どうした？」

「どうしたって、オウ力あなた怪我しているじゃないですか！」

そう言われて服を見ると確かに血が付いている。着ている服が黒色だったため分かりにくかったが、結構な量が付着している。

「ああ、これは俺のじゃなくて、ミレットと一緒に負傷者を運ぶ際に付いた血だ」

「そうだったんですか……。でも、そうするとオウ力は現場にいたんですね？」

「だから、こんな格好になってるんだが」

真剣な表情でイリアはオウ力を見つめる。

「私がいうのもなんですが、ミレットの所属しているパーティは実力者が多く揃ったところです。その彼らや同等のパーティがここまでする負傷するケースは、ここ最近じゃ見られなかったことです。

確認しますが、あなたとミレットはどうやってここまで来たんですか？」

話をはぐらかすこともできたが、イリアとは良好な関係を保っておきたいオウ力としてはできるだけ正直に話すことにした。

「俺の顕現させた式神をミレットに『使役』させてここまで移動した」

「では、その式神とは？」

「書類でも書いたように一年ほどある道場で教えを受けていた。そこで習得した技術で、魔物などに近い行使できる擬似生命体だ。今はその顕現を解いている」

「分かりました。次の質問です。」

あなたとミレットが負傷した彼らと会ったのは、戦闘前ですか？

それとも後ですか？」

「正しくは戦闘中だ。危機的な状況だったから、俺が魔物を倒した」
「……証拠はありますか？」

オウ力はズボンのポケットを探って、目的の物を取り出した。

「結晶が三個、つまりは魔物を三体倒したということですか？」

「まあな。それに開拓者になるための条件もそうだったはずだ」

できるだけ正直に話す決めてはいたが、馬鹿正直に話すつもりもなかった。イリアが勘違いしてくれるのならそれでいいし、多分妹のミレットから詳しい話を聞くのだからここで敢て訂正する必要もない。

そんなオウ力の内情を知ってか知らないでか、イリアは今まで固い表情だったのを呆れたものに変えた。

「あなたを初めて見たときに、この人は何かやりそうだと思っていただけど、まさかここまでとは……」

しかも、きちんと課題をクリアしてくるあたり、なんてゆうのか本当に非常識な人よね」

「そこまで言われると、何だか俺が本当に非常識みたいじゃないか」
「みたいじゃなくて、そうなんです」

ところでこの結晶ですけど、魔物の種類などを特定するのに少し時間がかかるので、ギルドへの登録と報酬はその後にしましょう」
「つまり？」

「合格ということです。また報酬は魔物の種類で金額も変わるし、特定の依頼というわけでもないからあまり期待しないで下さいね」
（なるほど、魔物の強さや依頼などによって報酬額は変わるか）

ギルドの料金システムについて少し学んだオウ力はそこで、突然表れた強靭な気配に気付く。魔物とも清浄とも言えない気が交じり合ったような不思議な気配に身体が戦闘状態へと移る。

気配の出所はギルドの出入り口のように、近くにいる開拓者たちがそちらを見て動揺している。オウ力は背中越しなのでその姿は確認できないが、イリアの愕然とした顔から相当の相手だと分かる。

ダッ――

相手がこちらを捉え、走ってくるのを感じる。距離が間合いに入った瞬間、オウカは隙なく振り返った。

そして、その飛び掛ってくる相手がどう行動するのか見極めようとした。いや、してしまった。

ガバッとオウカの頭部は飛来してきた者に包み込まれる。

いつものオウカなら避けることも迎撃することも容易かっただろう。しかし、結果として彼は何の行動も取ることができずに終わった。

「な、なっ……」

後ろではイリアの声が聞こえる。

それでもオウカは動けなかった。

（今、自分は何を見た――）

一瞬の内に見た光景を一つ一つ丁寧に思い出す。

並みでない気配をした者がギルドに入室。そして、周りが騒ぐ中、そいつはこちらを対象と定め、疾走。振り返った先にあった光景は――鴉の濡れ羽色の真っ直ぐな長髪と光を飲み込むような漆黒の瞳が印象的で、雪のように白い肌をした華奢な身体をした裸体の少女だった。

「はあっ！？ はあああああああああああああああああ
ああっ！？」

もう意味が分からない。何故？ どうして？ 幾つもの疑問がオウカの頭に浮かぶ。

きつと顔面は真っ赤になっていることだろうが、その原因がこうも近くには落ち着く術もない。

そして鼻から流れ出る熱いものを感じ、混乱した頭で最悪だと思

つた。

「お、この味は……やっぱり貴様が主だったか！」

少女は自分の姿をまったく気にせずに、身体を少し離してオウカの鼻血を舐めると意味深なことを言った。

この言葉が理解不能な状況に陥っていたオウ力を救う、一つの閃きとなる。

「主って、お前もしかして……」

「何やってるんですかッ!!」

周囲の騒然とした状態も忘れて話し合うオウカと少女の二人に、
ついにイリアの感情は爆発した。

無理もない。傍から見ると、白昼堂々とこのような行為に及ぶ彼らは新手の変質者と同義である。

「ちよつと待て！ イリア俺はっ」

「黙りなさい！　そして、離れなさい！　その子も早く服を着なさい！」

「……なんじゃ、服とは？」

[illegible]

少女から発せられる爆弾発言に誰もが驚きの声を抑えることができなかった。まさかこの現代社会で服を知らないとは、今までどんな環境で暮らしてきたのであろう。

イリアは貧血に近いふらつきを感じながら、まずはこの場を治めることにしたいらしい。

「だ、男性の方々は目を瞑って下さい！ 見てはいけません！！」
遅過ぎる注意に急いで目を閉じる男性たち。中にはまだ茫然としている者もいたが、彼らは近くにいた女性職員や開拓者たちに強制的に意識を奪われていった。

「オウカ、あなたも目を閉じなさい」

イリアの声に魔物以上の殺気を感じたオウカは無言で何度も頷く。

彼の頭部にしがみついていた少女は「お、おおお？」と言いながらも、驚異のバランス能力で離されないようにしている。

「あなたは離れる気はないのかしら？」

「離れる必要を感じんしのう」

オウカに会ってから何回目だろう。数える気も失せた溜め息をついてイリアはオウカの手を引いた。

結果、少女はオウカから離れることはなかった。

オウカと少女の二人を別室に移動させ応接用ソファーに座らせると、イリアは息をついた。

何だか、この数分で一気に老け込んだ気がする。

（まだ私、二十二なのにこんなに疲れるだなんて転職した方がいいのかしら……）

自問自答しながらもイリアの動きは的確で、この部屋に常備されている薄手の毛布を取り出すと少女に渡した。

「いつまでもその格好じゃ風邪ひくわよ。あと、ソレははしたないから場所を変えなさい」

「すまぬ」

イリアのどこか諦めた声にオウカは「諦めんなよ！」と言おうとしたが、毛布を受け取った少女が頭の上でもぞもぞやっているのでも何とも言えずに終わった。

定位置が決まったのか、少女は毛布を身体に巻きつけてオウカの頭上で体育座りをしている。少女の平衡感覚も凄いが、細い体つきとはいえ少女一人を頭の上に乗せたまま微動もしないオウカの身体能力も並の人間ではありえないものだ。

「もう目を開けていいわよ」

「助かる」

目を開いたオウカは目の前に座るイリアを見て少し怯んだ。彼女の目は据わっていて、どこか達観した者の雰囲気醸し出していた。

「どうしてこういうことになっているか教えてもらえるかしら？」

「あ、ああ、分かった」

この場の主導権は完全にイリアの掌握するものとなっている。逆らうような馬鹿な真似はしないでおこうと決心し、説明しようとした時、カチャッと扉の開く音がした。

「あのー、お姉ちゃんとオウカがここにいて聞いてただけど……」

オウカが扉の方を向くと、ミレットが室内を窺うように顔を出していた。

（また、一騒動あるな。……それにしても、腹へったな）

現実逃避を始めるオウカの予想したとおり、ギルド内に響くほどの悲鳴が聞こえた。

三十分後、イリアが騒ぐミレットを落ち着かせると同時に、オウカはこの少女について自分の予測を話した。

しばらく室内を沈黙が満たしていたが、ミレットがおずおずと確認する。

「つまり、この子はわたしたちが乗っていた式神だと？」

「俺はそう考えている。違ったら反対の頬も叩いてくれて構わない」「ううう、ごめんなさい」

オウカの左頬には真っ赤な手形がくつきりと浮かび上がっている。もちろん、実行したのはミレットだ。彼女は悲鳴を上げるや否や、真っ直ぐにオウカの元へ向かい、利き手である右手をフルスイングした。彼としては避けるのも簡単だったが、このような事態を招いてしまった自分への罰の意味を込めて敢てその張り手を受けた。

その後、オウカの話聞くうちにミレットの態度は恐縮したものへと変わっていったことは言うまでもない。

「それでオウカ、確証はあるの？」

「あるにはあるが、ここは本人に聞いた方が早いだろ」

今度はイリアの疑問を頭上にいる少女へと振る。

少女はそれまで口を閉ざしていたが、オウ力の催促に鷹揚と答えた。

「そうじゃな、主の考えは概ね間違っではおらんよ。ただ一つ訂正させてもうらうとすれば、我は式神だったが今はそうではない」

「というと、やはりその気配から感じたとおり」

「うむ、依り代となった二つの物質と主の生命力から新たに転生したわけじゃの」

「なるほどな。しかし、俺は今までそんな話聞いたことがないぞ」

「無論、我もじゃ」

残りの二人を置いて、お互いの推論を語りだすオウ力と少女にミレットは慌てて声を上げた。

「ちよつと！ 全然話が読めないんだけど、それに依り代ってあの木のことでしょ？」

「仕方のない娘じゃのう。お主もあの場におったであろうが」

「そ、それはそうだけど！ お姉ちゃんはおそこにいなかったんだし、初めから説明してよ！」

どうやらミレットは姉のイリアを盾に、詳しい説明を聞く作戦を立てたようである。妹を見るイリアの視線が突き刺さるのが分かるのか、冷や汗を浮かべている。

「ごめんなさいね。実際私はその場にいなかったから教えてもらっていいかしら？」

「主よ、よいか？」

「俺は構わない」

オウ力が了承すると少女は話し出した。案外、面倒見がいいのかもしれない。

「娘よ、お主らはあの場で何と戦っていた？」

「何って、シンフルベアよ」

ミレットから出た強大な魔物の名前にイリアは大声を出しそうになった。それでも抑えたのは、自分以外が周知していることだと認

識したからだった。

「ほう、我らはそのような名でお主らに呼ばれておるのか。

まあいい。簡潔に言おう、我はあの獣たちの女王じゃ」

「「えっ!?!」」

オウカと少女を除く二人が今度こそ声を上げる。それほどまでに信じられないことを少女は言ったのだ。

「まあ聞け。お主らは我らを倒すとイシを手に入れるであろう」

「イ、イシって、結晶のこと?」

「それじゃ。ここで話が戻るが、あの場で我を倒した主は我の力の宿木となる霊木を用意し、そこにイシを、我の意思を入れ、顕現させるため自分の生命力を分け与えた。

そのときにはまだ現在ののような自我はなかったが、茫洋とした意識の中でお主の声も聞いておる。娘よ、仲間を思う気持ちは良いことじゃ」

ミレットは目前にいる少女が、本当にあのときの式神なのだと実感する。

「でも、どうして今の姿になったの?」

「その疑問は当然よな。だが、それに関しては我にも主にも分からぬ。

現に我も顕現を解かれた際、再び永い眠りにつくのだと思ったがそうもならなんだ。違和感を感じて目を開けるとこの姿になっておったというわけよ。

まあ、近くに主の気配を感じたから行ってみたら、このようなことになっておるしの。

ちなみに今の我は式神でも魔物でもなく、言うなれば魔人かの「意味深な言葉がよほど気に入ったのか、満足げに少女は話を終えた。

フォウント姉妹は話の内容の重大さに気付いてどうしようか迷っていたが、少女の様子と今の言動から最悪の事態にはならないと判断し、この場で聞いたことを秘密にすると誓うのだった。

もつともこんな話、誰が聞いてもこちらの正気を疑うに違いない。
「ちなみにお前の名前は何っていうんだ？」

マイペースさを取り戻したのか、オウ力は少女に聞いた。

「我らに名などないよ。強いてあげるなら、先程娘が言っておったシンフルベアかのう」

「そうか、なら俺が名付けてもいいか？」

「いいのか主よ？」

「ずっとお前とか言うよりはいいだろ。」

……決めた。お前の名はシィーアだ」

「ほう、いい響きじゃな！」

シィーアと名付けられた少女は嬉しそうに微笑みながら、自分の名前を大切に心に刻む。

思わずもらい泣きをしてしまうミレットと、微笑ましそうに見つめるイリア。

「ところで、ミレットは何か用があつたんじゃないのか？」

「え？ ……あ、そうだ！ オウ力に報告があつたんだよ！」

他人に涙を見られるのが恥ずかしいのか、ミレットはいつも以上に声を明るくして言った。

「さつき、仲間たちの治療が終わってね。医者が言うには、命に別状はないんだって！」

「それは本当に良かったな」

オウ力が素直に答えると、ミレットは花が咲いたように微笑んで頷いた。

「それで、一瞬だけ意識が戻ったリーダーから伝言を頼まれたんだけど……」

恥ずかしそうに俯く彼女に、オウ力は疑問を浮かべる。

「どうしたの？ 黙ってては何も分らないわよ」

姉の後押しでミレットは踏ん切りがついたように一気に言った。

「自分たちの療養中はオウ力に面倒を見てもらって！ それから、彼の戦い方は今後のわたしのためにもなるから、必ず一緒に行動す

るようにつて！

不束者ですが宜しくお願い致します！」

何だか別の意味で申し込まれた感じのする内容だったが、自分のペースを取り戻していたオウ力は、

「別にいいんじゃないか」

「ホントに！？ やったー！！」

喜ぶミレットを見ながら、一時的な弟子みたいなものだと軽い気持ちで納得した。

それはそれでなんだか面白くないと思う人物が二人ほどいたことに、オウ力自身まったく気付いていなかった。

「主よ、我々はそろそろ行くでしょう。夜が近づいておるし、シィアは腹が空いたのだ」

オウ力の頭からシィアは降りると、彼の手を引つ張るように扉へと向かおうとする。シィアの背中からオウ力を何かから早く引き離したいといった意志を感じるが、腹がへったのはオウ力も同じことだったので抵抗することなくソファアから立ち上がった。

「それもそうだな。またな、イリアにミレット」

突然の展開に目を白黒させる姉妹。

「え、オウ力はどこか泊まる宿のあてはあるの？」

「特にないが、何とかなるだろ」

「確認なんですが、その子と二人ですか？」

「まあ、こうしてここにいるのも俺のせいでもあるわけだし」

「ちよつと待ちなさい！ あなたはその子をその格好のまま行かせるつもりですか！？」

部屋から出て行くこうとするオウ力たちにイリアの鋭い指摘が入る。シィアの現在の服装は、薄手の毛布一枚。かなり防御力の低い装備である。これにはオウ力も固まった。

「なんじゃ、このふわふわしたのを返せというのか？ 肌触りがよくて気に入っておったが、それならば仕方がないのう」

上半身から足元まですっぽり包んだ毛布を外そうとするシィア

だったが、それは雷速で動いたオウカに阻まれる。

「シィーア、一つ人間の常識というものを教えてやる」

「なんじゃ？」

「俺らが着ている服というのはその身体を包むための物だが、実はもう一つの意味を持っている」

「それは、なんじゃ？」

オウカの静かに染み込む声に、シィーアは真剣な表情で先を促す。

「それは、その人の権威だ」

フォウント姉妹はオウカが何を言っているか分からなかったが、常識を知らない彼女は驚愕の事実を知ったように自分の身体を見た。

「そ、それではもしやシィーアは……」

「ああ、もし人前で服を着ていなければ、そいつは女王でもなんでもない。ただの人だ」

シィーアはオウカの言葉を真に受けてしまったようで、愕然としながら自分を包む毛布をぎゅっと握り締める。

姉妹はオウカを半眼で眺めながらも、正しくはないが間違ってもいない答えに腹黒だという認識を強めた。

「すまんが、娘よ。これは返せなくなってしまった……」

本当に申し訳なさそうに謝る彼女を見て、イリアは慌ててフォロ―した。

「い、いいのよ、気にしないで？。それよりも行く当てがないのなら、その私たちの、家に」

「今からわたしたちの家に来ない？ 泊める部屋も二人分なら余っているし」

次第に尻すぼみになっていく姉の言葉に被せる形でミレットは言った。

（男らしいわ！ ミレット！）

（男じゃないけど、褒め言葉として受け取っておくっ）

姉妹だけに通じるアイコンタクトでやり取りしているのを見て、オウカは少し勘違いしたようだった。

「あー、迷惑だろ？ 俺らのことは気にしないでい」

「「迷惑だなんて思ってますん！」」

さすが姉妹と言うべきか息もぴったりの反論で、オウカに全てを言い終わらせない迫力があつた。

「……それじゃ、世話になるかな。宜しく頼むよ」

「主よ、それは」

「シィーアちゃんも美味しい料理があるけど食べるわよね？」

「……」

「お姉ちゃんの作る料理、ホントに美味しいんだよ」

「……し、仕方ないのう。人間が作る料理というものを食べてみようかのう」

最大の難関であるシィーアを、料理という名の攻撃で攻め落とし二人は急いで準備をすることにした。

その後の展開は慌しかった。

まずはシィーアの着替えを用意することとで、ミレットは自分のお古を候補に挙げ、徒歩十分の距離にフォウント邸が建っているとの説明すると止める間もなく部屋を飛び出した。

ミレットは開拓者のギフトを最大に使ったのか往復を五分で戻ってくると、その手にはシィーアの髪と瞳に合わせたのか黒色のワンピースとオウカが今着ている服と似た男性用の服。

彼女は「お父さんのだから、勘違いしないでよね！」と念を押すように言ってきた。オウカが空気を読んで自主的に退室し、着替える場所を探している間、シィーアがこちらに助けを呼ぶ声が聞こえた気がしたが、気のせいだ。

もう入っていいよ、というミレットの声を受け、オウカが入室するとそこには少し大きめのワンピースを見事に着こなしたシィーア

が立っていた。生地が余ったりし易い場所は太目の紐を使って補正代わりにしているようだ。

「へ、変か？」

「いいんじゃないか？」

質問に質問で返す朴念仁。ミレットがその不屈き者の頭を叩いたのは無理もないことだった。

イリアはというと、その間に退勤を済ませるとすぐに自宅へ戻り、料理の準備をしていた。実のところ、家には現在、イリアとミレットの二人しかいない。別に両親と死別したわけではなく、お互いに仕事の関係で家を留守にしているのである。久しぶりに多めに作ることもあつて気合いを入れると、イリアは顔を赤くして微笑んだ。

「何だか、これって、……さんみたい……」

包丁が刻むリズムで少し聞こえづらいところがあつたが、彼女は幸せそうに料理を作っていた。

オウカたちがミレットの案内でフOUNT邸に着くと、彼はまずその家、いや屋敷の広さに驚いた。ミレットに聞いてみると両親が仕事で成功しているお陰らしい。この都市には驚かされてばかりだと思ひながらオウカが屋敷の中に入ると、いい匂いが漂っていた。

シィアは我慢できないとばかりに匂いの元へ駆け出し、オウカとミレットは苦笑しながらそれを追いかける。

キッチンに入ると私服姿に着替えたイリアが料理をしており、その後ろでシィアはそわそわしている。

イリアはオウカたちに気付いたようで「あ、お帰りなさい。もう少しで料理が出来上がるからもう少し待っててね」と優しく歓迎してくれた。

モカ色のワンピースの上に、ライトブラウンのカーディガンと落ち着いた服装になっており、その仕種と合わせてどこかしら若奥様を感じさせる。

「お姉ちゃんのあの姿を見てどう思った？」

「いいんじゃないか？」

再度、同じことを言った朴念仁に容赦なくミレットは頭を叩く。そして、それに追隨する一撃を放ったのはシーアであった。女同士何か固い結束が生まれたのか、二人は健闘を称えるように拳をこつんと重ねたのであった。

その後、夕食時にミレットも私服に着替えてきたのだが、何が起きたかは言わずもなだろう。

そして現在に至る――

今、オウ力は自分用に当てられた個室のベッドで横になっていた。部屋の明かりは消しており、窓から入る月の光が部屋を照らしていた。

就寝前にシーアが「主と一緒に寝る」という爆弾発言をしたのはさすがに驚いたが、そこはフオウント姉妹の頑張りで未遂に終わった。

（今日はホントに色々あったな……）

しみりと彼が思いに耽るのも無理はない。彼だけではなく、彼を取り巻く人々も同じように考えていた。

今日は驚きの連続だったが、明日は何かあるのだろう――

彼らは思い思いに就寝するが、オウ力は何かを忘れている気がして眠れないでいた。

（……………思い出した）

何だかんだで結局は自分も疲れていたのかもしれない。

オウ力は頭をかいて呟いた。

「開拓者の登録、まだだった……。

明日にでもイリアに登録してもらうか」

思い出したことで気掛かりがなくなったのか、数秒で彼は深い眠りについた。

こうして、オウカの忙しい一日が幕を閉じたのである。

第四話 慌しい一日の終わり（後書き）

今回もお読みいただき誠にありがとうございます。
大体一週間に一回の投稿となっております。

今回は少し話が長いので少し文章などに雑なところがあるかもしれませんが。

それもこれも私の文章力のなさが原因です。
ご意見・ご感想・誤字脱字がございましたら、お気軽にご指摘・ご指導下さい。

第五話 ギルド登録（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

第五話 ギルド登録

『何故この子は、町に災厄を持ち込むんだ』

『気持ちの悪い子だ。ここには来ないでくれ』

『お前の母も父も普通の人間なのに、お前は……化物だ』

暗闇の中で一人の男を侮蔑する言葉は止むことがない。
ろうにやくなんによ

老若男女問わず、誰もが言葉の裏に彼の死を望んでいる。

生まれてからずっと言われ続けている言葉だけに男を縛る呪いとなつて、彼が生きている限り永遠に消えることのない重石^{おもし}となる。しばらくの間、永遠とも続く怨嗟の声を無言で聞いていたが、ふと新しく聞こえてきた声に男は怯えるように反応した。

この空間では寒いと感じることもないのに、身体が震えるのを止めない。

『皆さん、待つてください』

やめろ。

『この子は人とは違うのだから、仕方ありません。皆さんで彼を人にしてあげましょう』

やめてくれ。

『さあ、一日一回その想いを込めて、彼から獣を追い出すのです』
やめてください。

『その想いが強ければ強いほど、痛みを伴うかもしれませんが、彼の為なんです』

ごめんなさい。

『では、始めましょう——』

ごめんなさい、もうやめてください。

『醜悪な魂をその肉体に宿した哀れな子、そして愛しい我が子——
オウ力。』

今日も苦しまずに眠れるといいですね』

ガバツ――

「ハアハアハアッ！ ゲホツ……グ、ゲホツゲホツ………」
上半身を勢いよく起こし、オウ力は目覚めた。荒い呼吸とそれを抑えようとした反動で咳き込み、再度呼吸が乱れる。

この時季の朝はまだ肌寒いというのに、彼の全身は汗で濡れていた。

暫くしてようやく呼吸を整えることの出来たオウ力は、小窓に腰掛ける少女に気付いた。

彼にしては珍しく、これだけ近くにいるのに気付くことが出来なかった。別に少女が気配を消していたというわけではない。それだけ、彼は冷静さを欠いていた。

「主よ、もう大丈夫か？」

白い簡素な寝巻き姿の少女は表情を動かさずに問いかけた。

「ああ、大丈夫だ。しかし、急に咳き込むとか風邪でもひいたかなはぐらかすようにオウ力は自分の喉を撫でたが、少女は否定する。『そうではない。シィーアが言いたいことを主は理解しているはずじゃ』」

小窓に腰掛ける少女――シィーアは漆黒の瞳でオウ力を見つめる。優しい朝日が小窓から入り込み、雪のように白い肌をした華奢な身体と、それに反比例するような鴉の濡れ羽色の髪をしたシィーアを優しく包み込んでいた。

神々しくも、どこか儚く感じさせる一枚絵。

きつとシィーアは心に巢食う深い闇を聞いてくれるだろう。それがどれ程醜悪で、嫌悪を促すものだとしても、彼女は何も言わずに無条件で聞いてくれるだろう。

それでも、オウカは拒絶した。

「……もう大丈夫だ。心配するな」

「了解した」

あっさりと彼女はその意味を理解し、頷いた。

小窓から床へ降りて、シィーアはベッドに近づきオウカの目の前に立つと頬を膨らませた。

見た目で言うとシィーアは異国の美少女といった容姿をしている。その少女が頬を無表情で頬を膨らませているのは、何とか微笑ましいものがある。

「どうした？ さっきのことで不満があるのか？」

「先程のことはもうよい。主が話したくないことを無理に聞いても仕方がないじやろ。」

シィーアが怒っているのは別のことじゃ

別のことと言われ、オウカが思いつくのは昨日の出来事だ。もつとも昨日初めて会ったのだから、それ以外に思いつくものはないし、話題が変わるのは好ましいことだ。

「すまん、初めから箸は難易度が高かったな」

「違いわ、馬鹿者」

ポコッと頭を叩かれる。それにしてもこのシィーアという少女、こちらを主と呼んでいるが全然敬う気持ちを感じられない。何を基準に主と呼ぶのか今度じっくりと話し合う必要がありそうだ。

「すまん、分かん」

「……うのことじゃ」

「え？ 聞こえなかったからもう一度頼む」

非常に小さな声でシィーアは答えを提示したが、普段は闊達^{かつたつ}ではきはきした物言いの彼女にしてはあまりにも小さな声にオウカは聞

き返した。

「ふ……」

「ふ？」

「服装のことじゃ！ 主よ、シィーアを謀^{たばか}ったであらう！」

顔を真つ赤にして少女はこちらを少し涙目にこちらを睨んでいる。初めて見る表情にオウカは、シィーアも人として生きていることを改めて実感した。彼女は元々、オウカが魔物の結晶と神木を依り代に即席で顕現した式神であつたが、何の因果か人間に転生した。そう昨日の話では聞いていたが、完全に信じる要素としては薄かつたのだが、こうも感情の発露が顕著であれば信じざるを得ない。

「いや、俺は嘘を教えたつもりはなかつたんだが」

「いいや、主はシィーアに嘘をついたのじゃ！ 就寝前に娘たちが湯浴みをすると言つて、我の目の前でその衣類を脱ぎだした際の驚愕と、あるうことかその後シィーアを……」

尻すばみになったシィーアの説明にオウカは合点がいった。確かに服装について教えたときに、人前では裸になつてはいけないといった話をしたような気がする。しかし、それにしては昨晚の夕食時に彼女はオウカをからかつてか積極的に脱ごうとしていたような気がしないでもない。

「でも、シィーアは夕食のときも脱ごうとしてなかつたか？」

「あ、あときは主の初心^{しんしん}な姿が……っ、乙女の秘密じゃ！」

実に乙女とは複雑怪奇なものだとオウカは納得することにした。

「それよりも先程の話よ！ 娘たちに本当のことと、他にも世情のことを聞いたからよいものを、あのまま勘違いしたままではシィーアが恥をかいたであらう！」

正直な話、オウカと初めて会ったときの彼女の姿を考えると些細なものだと思ふのだが、そこは言わないほうがいいのだらう。シィーアは乙女なのだ。

「でも、俺が言ったこと間違ひではなかつただろ？」

「間違ひではないことと、正しいことは大きな違いじゃつ。あのと

きのことを思い出すと今でも腸が煮えくり返りそうになる……」

「だったら昨日来ればよかったんじゃないのか？ シーアなら俺が起きていたこと分かっていただろ？」

「シーアもそう思ったんじゃないが、娘たちが夜に殿方の寝所に入ることを拒んだのよ。我としては主は既に認めている雄故にそうなくても構わんというのに」

シーアの雰囲気が落ち着くのは有難いことだが、昨日に続いてこの爆弾発言は非常に困る。きつと人になったばかりだから常識が足りないのだと、オウカは他人事のように己を落ち着かせた。

「ま、まあ、男の部屋に夜一人で来るのはあまりよくないな。そこら辺もミレットたちに聞いておいた方がいいだろう」

「そこら辺とは交尾のことか？」

「ぶッ!？」

今何と言った？ 聞き違いか？ きつと聞き違いだろうと、オウカが無理やり流そうとしているところをシーアは更に追撃する。ベッドに腰掛けているオウカの領域へ片ひざから侵入する彼女の瞳はうつとりと艶を帯びていた。

「それなら知っておる。シーアも元は獣の女王よ。しかし、あそこには我よりも強い雄がおらんかったから誰も寄せ付けなかったがな。その点、主は合格じゃ！」

じゃから、シーアも安心して初め」

「ちよつと待ちなさい！ シーア、あんた何言ってるのよ！」

バーンと、大きな音をたてて扉が開き、ミレットが慌しく部屋の中に入ってきた。顔が赤いことから、たぶん扉の前で二人の会話を盗み聞きしていたのだろう。

しかし、絶妙のタイミングである。それ自体、決して褒められたことではないが、オウカとしては助かったという思いが強かった。

「なんじゃ娘。シーアと主の時間を邪魔しようとは、魔物に蹴られてなんとやらじゃぞ？」

「何が邪魔しようとは！ あんたオウカに昨日のことを謝らせるっ

て言っただから部屋に入ること認めたのに、それが何でこんなことになってんのよっ！」

こいつが朝から部屋にいたのはそういうことか、とオウカは理解した。確かに昨日の夜、シィーアがオウカと一緒に寝ると言って一悶着があったが、そのときは彼女もフウント姉妹の説得で納得していたはずだった。朝だからといって、オウカが寝ている部屋に無断で入ることは彼女の流儀に反することに違いない。つまり、姉妹のうち誰かがオウカの部屋に入ること許可したことになる。

シィーアは悠然とオウカに背中を預けて、ミレットに微笑む。これがミレットやイリアだったらオウカも慌てただろうが、如何せん相手はシィーアである。幼い容姿では彼にとってじゃれているとか認識されなかった。

「強い雄と一緒にいればこのようなことにもなるう。仕方がないことじゃ」

「なっ！ この破廉恥お子様はっ！」

「は、破廉恥じゃと！ お子様じゃと！？ 言っておくがな、シィーアはお主たちよりもずっと年上じゃぞっ！」

「そうは全っ……………然、見えないわよ！ もしそれがそうだとしても経験もないんじゃ、あんた^{みみどしま}耳年増もいいところじゃない」

「言っではならんことを言いおったなっ！ 娘っ、だったらお主も耳年増じゃっ！ お主からは生娘あちゃっ」

言葉の途中でシィーアは頭を痛そうに両手で押さえる。それを行ったのはもちろんオウカだ。彼は半眼でシィーアとミレットの二人を見ていた。

「…………お前ら、朝からうるさい」

「ごめんなさい…………」

「うう、申し訳ない…………」

先程までの姦しいやり取りはオウカの一言と一撃で、気まずい雰囲気になった。その空気を払拭するようにオウカはミレットに確認した。

「ミレット、イリアはまだいるか？」

「え、お姉ちゃんは今もう仕事に行ってるけど、何か用事でもあった？」

仕事ということはギルドにはもう出社しているということか。昨日は有耶無耶になってしまい、結局のところ開拓者の登録は出来なかったし、予定通り今日は登録を済ませてしまおうとオウ力は決めた。

「ああ、開拓者の登録がまだだったから、それでな」

「だったら朝食が終わったから行きましようよっ」

「そのつもりだ」

「それにわたしとダブルスの登録もしなきゃいけないし、そうと決まったら早く朝食にしましょ！」

そういえばそんなこと言ってたな、とオウ力は今更ながら思い出したが、ミレットの表情が何だか嬉しそうであるため、敢てそれは言わなかった。

「……少し待つがよい。そのだぶるすとはなんじゃ？」

不思議そうにシィーアは尋ねた。彼女が普通通りに話すのであまり気にしていなかったが、やはり元が魔物であるゆえ昨今の人の常識を知らないことも多いのだろう。

「ダブルスっていうのは、パーティになるほどの人数じゃないけど二人で協力して一つのことに取り組むことを言うのよ」

「それならば、だぶるすと称するのは間違いではないか」

「どういうこと？」

「シィーアと主はだぶるすじゃからのう。お主が加わるとすれば、三人になる」

「え、あんたもしかしてわたしたちと一緒に行動するつもり？」

ミレットは驚いたようにきょとんとした顔のシィーアに確認する。もっとも、ミレットが驚くのも無理はない。オウ力のように気配に鋭敏な人間でなければ、シィーアは見た目少女と言っている容姿をしているのだから心配するのも当然でもある。

しかし、その実は元シンフルベアの女王。今でも強靱な肉体と精神力、そしてオウカには劣るだろうが並みの開拓者では足元にも及ばぬ程の圧倒的な戦闘能力を有しているはずなのだ。

「まったく、娘の目は節穴か？ シーアほど主の相方に相応しい者は他においておるまいに」

「いや、いやいやいや。ちょっと待って、もし仮に行動するとしても、シーアはその、魔物と戦えるの？ それにどうやって戦うのよ？」

「無論じゃ。あの中では弱肉強食、強いものが生き、弱いものは死ぬ。それこそが日常よ。」

あと戦い方に関してじゃが、ここで見せてもよいが、多分この場は崩れるぞ。それでもよいのなら見せてやらんこともないがの？」
「ん……シーアはそう言ってるけど、オウカはどう思ってるの？」

自分では決められないとばかりにミレットはオウカへ判断を委ねた。彼女としてはシーアのことを心配して止めようとしたのだが、当の本人は自信满满といった風だったので現在保護者に近いオウカに意見を聞いてみようといったところだった。

オウカとしても答えは決まっていた。

「シーアは間違いなく強いから、足手まといにはならないさ。シーアも分かったな？ ミレットは俺らの仲間だ」

「了承した」

「そう、なら決まりね。よろしくね、シーア。ふふふ」

「よかろう。娘よ、こちらからも宜しく頼む。ふふふ」

オウカが見守る中、ミレットとシーアの二人は握手を交わし、お互いに仲間としての認識を確かめ合う。不敵な笑みを浮かべて見詰め合う二人を見ながらオウカは、この先にもきつと色々ありそうだが退屈しないということは間違いないだろう、と知らないうちに微笑んでいた。

その後は三人でイリアの作り置きしてくれた朝食をいただき、昼

前にはギルドに向かうことが出来た。

ギルドの待ち受け場所では昨日に比べて多くの開拓者が集まっていた。おそらく昨日のことから、封印区域の現状を確認するための依頼や門周辺の魔物の討伐といった依頼が更新されているのだろう。そんな中、オウ力たちは昨日と同じ部屋にて待機していた。

理由は二つある。一つは現在開拓者の出入りが多いため、時間のかかってしまう登録関連は別室にて対応するようになっていないこと、もう一つは昨日のこととどこから情報が漏れてしまったための措置でもある。もっとも、開拓者や他のギルド職員たちも正確なことは知らない。だが、昨日の負傷したパーティーをオウ力たちが搬送したことから、何かがあってそれを知っているということだけでも重要なのだ。

情報は力でもある。それだけに彼らの知っている事実を皆が知りがったが、これには情報規制が働いた。ゴルディエス・ハーグラ率いるこの都市の警備隊から後日正式に発表するまで当事者たちへの無闇な干渉を禁ずるというもので、この場の騒ぎを鎮火させたのであった。しかしながら、好奇心は猫を殺すだけあって、露骨には動かないながらもこそそこそこちらを窺う視線の中では落ち着けないのも確かだ。

ギルドに出勤していたイリアはそういった事態を考慮して、オウ力たちが現れると同時にこの部屋へ案内したのだった。

しばらくの間、オウ力たちがお茶などを飲んで時間を潰していると、扉を叩く音と共にイリアが戻ってきた。彼女の手には何枚かの書類と、頑丈な素材で作られた鈍色のトランクケースが握られている。

「ごめんなさいね。待たせたかしら」

イリアはそう言うとおウ力たちの対面にあるソファに座り、彼らの間に置いてある長机に書類を並べた。

書類は三枚あり、開拓者の心得などが記載されている文面のものが二枚と、もう一枚が封印区域で行動する際のメンバー登録に関する書類のようだ。

「結果から言うわね。オウカ・ライゼス、あなたは本日からギルドの開拓者に登録されました。また同様にシィーアも開拓者として登録を受理されました」

付け加えて彼女は、「シィーアちゃんは身元が身元だし、あなたの妹として登録しておいたわ」と言った。つまりギルドでの登録名称でシィーアは、シィーア・ライゼスということになる。

何故、シィーアも開拓者として登録しているかというと、今後封印区域に入る際、その方が都合がいいからである。もっとも、その話をしたときのイリアの反応は今朝の一件を思い出させるものであったが、無事登録出来たようだ。

ここで補足となるが、この世界に於いて戸籍や住民票といった個人を証明する物はただの紙切れと同然に近い形で扱われている。

理由としてはやはり千年前に起きた大災害が原因であることは間違いない。あの時代に何処で誰が住んでいるのかということは無価値であり、それを証明するくらいなら他にやるべき事があまりに多くあった。そして死ぬ者も、行方不明になる者も数え切れないほど増えるために、戸籍や住民票を登録しても無意味に終わるとというのが拍車をかけた。

千年後の今日になっても、その風潮は変わることがない。何故なら、人々にとって門という柵で猛獣を捕らえても、その猛獣がいつ飛び出して襲い掛かってくるのか不明であり、都市以外に住む人間の数も定かではないために自然とそうなってしまうたのだった。

閑話休題――

オウカとしてはシィアが別段妹という立場になるのは問題なかったが、彼女はそうではなかったらしい。

「何故妹なのじゃ？ シィアの立場から妻という言葉がお主らの世界では一般的ではないのか？」

シィアとしてはいつもの調子で言ったのだろうが、この単語に敏感に反応したのは意外にも多くの男性ファンを持つイリアだった。もっとも彼女としてはそのファンたちに興味はなく、自分たちの生活に問題を起こさない限り干渉しようという気さえ無い。

簡潔に言えば、ビジネスライク。つまり、彼らファンたちはイリアに見向きもされていないのが現状であるが、彼らも彼らで諦めきれない思いがある。別にイリアは彼らが嫌いなわけでもない。ただ、本当に一度の生涯を捧げられる人と結びたいのだ。

結果、イリアは結婚という多くの女性が一度は夢見る晴れ舞台に近いようできて、無縁の遠い人生を送っているのであった。

だからこそ、イリアにはイリアの一家言がある。

「シィアちゃん、はつきり言いますが妻とはいくつもの苦難に立ち向かい、そして勝ち取った者が名乗っていい称号です。それを貴女は軽々しく言うのですから、余程の自信があるんですね？ 無いのであれば、貴女は妹という立場すら身に余るものです。実際のところ、シィアちゃんは妻になるための努力をしているのですか？」

朝早く起きて朝食の準備をし、夫が快適に仕事に出かけられるように着替えの用意や体調管理もしっかり把握する。そして、夫がいない間は家の掃除や洗濯を行い常に住み心地のいい、どうしても帰ってきたくなる環境にすることが必要最低限に求められる技巧です。

また、夫に尽くすだけが愛情ではありません。時に厳しく、お互いが研磨できる存在であることが重要なのです。特に」

「お姉ちゃん、話が脱線してるよっ」

イリアの怒涛の言葉攻めは、妹の強引な割り込みによって中断された。結婚や夫婦といった単語はイリアにとって鬼門であると、オウカは心のメモ帳に注意書きとして記入した。彼女は彼女で苦労し

ているのであろう。

そんな舌鋒を振るったイリアはというと、今更ながら羞恥心が沸いたのか頬を赤くしていた。彼女は座を取り成すように、コホンと咳払いをして茫然としているシーアに告げた。

「ということで、シーアちゃんは妹なのです。分かりましたね？」
「う、うむ、心得た」

イリアの論法に気圧されたのか、シーアは反論すら出来ず頷くしかなかった。オウカとしてはここまで話が広がるとは思わなかったが、とりあえずこの場は治まったようだ。

「すみません、話が逸れてしまいましたね。先程の続きですが、オウカとシーアちゃんの開拓者への登録は既に行っていますので、後は最後の登録を行うだけです」

イリアはそう言うと言に脇に置いていたトランクケースから握り拳くらしいの小さな箱を二つ取り出した。見た目はただの箱にしか見えないうが、ここでそれを出すということは登録に必要な物であるに違いない。

イリアはオウカたちが見ている中、その箱の蓋を開いた。箱の中は円形の窪みがあり、その中心に針が設置された造りになっていた。一見すると、方位磁石に近い形状をしているが針の浮きが無いため、その用途は不明である。

「これはギルドに登録いただいた方々には必ず登録していただいていることなので心配はありませんよ。

ギルドでは生位磁石といって、開拓者の位置を把握するための装置となっています。正確な場所やその人の行動までは分かりませんが、登録された開拓者の位置でしたらこの装置で確認出来るようになっています」

要は開拓者という強力な力を得た人物が問題を起せば、この生位磁石という装置で追跡することが出来ると思っていいだろうとオウカは理解したが、実際に悪い方面だけで捉える必要はない。

ギルドでの通常の用途としては、封印区域やそれ以外の場所で開

拓者が遭難などの事態に陥った場合、この装置を持った搜索者がナビ代わりに使用して要救助者を早期の段階で発見することが目的となっている。

唯一のデメリットは死体には反応しないことである。この装置は言葉の通り、生命力に反応するようになっていたため、肉体が生命活動を停止する、つまり開拓者が死亡した時点で生位磁石の針は動かなくなり、その機能を停止する。

これらの説明をイリアは慣れた様子で、滑らかに分かり易く話してくれた。

オウカとシィアの二人はイリアの説明を聞くと興味深げに箱を手にとつて眺めた。

「この箱が、そんな便利な機能を搭載しているとはね」

「確かに不思議じゃのう」

「で、これはどうやって登録するんだ？」

オウカの疑問を先読みしてか、イリアは既に登録用の機材である注射器をランクから取り出していた。注射器は二本あり、オウカとシィアの分であることが分かる。

「これで採血させていただきまして、それをこの窪みに移します。採血させていただく量も少量の三ミリリットルになりますので問題は無いと思いますが、体調が優れなければ先に言っておいてくださいね」

イリアは丁寧に教えてくれているのだが、オウカの耳には届いていなかった。

（今、採血と言ったか……？）

オウカは以前、住んでいた村で初老の男性開拓者に出会ったことがある。そのときに彼からどうやってたら開拓者になれるのかなど色々と尋ねたことがあったが、そのときでさえ生位磁石や採血が必要といった話は出てこなかった。

冷静になれば情報秘匿のために老人が話せなかったということが理解できるのだが、今の彼にはそう考えることも出来ない状態にあ

った。

「……それは必須なのか？」

なるべく不自然でないように心掛けながら、オウ力は質問した。本音を言うと、必須でないことを願った。

しかしながら、イリアの答えはオウ力の希望を打ち砕くものであった。

「そうですね。基本、開拓者になるのは簡単ですが、その管理に関しては非常に難しいものとなっていますので、これは必須となっています」

「……分かった」

努めて平坦な声で了承を示したお陰か、イリアは特に気にするでもなく着々と準備を進めている。トランクケースにはこの登録に必要な一式が用意されているらしく、中から酒精綿の入った容器や駆血帯などを取り出して長机の上に広げている。

「では、オウ力から採血をさせていただきますね。書類ではA型と記入されていましたが、間違いありませんね？」

「ああ」

必要最低限の返事でオウ力が答えると、イリアは「では、右腕をまくってこちらに出してください」と指示した。

素直に応じるオウ力だが、彼との付き合いが長い者がいたら疑問に思っただろう。何故、彼はこうも余裕がないのか、と。

だが、ここには昨日初めて会ったばかりのミレットとイリア、そしてシィアの三人しかいない。そのため、誰もオウ力の変化に気付くものはいなかった。

イリアはオウ力に採血をする手順としてアルコールの過敏反応の有無を確認した後、右腕を駆血帯で巻いて浮き上がった静脈を確認した。目的の血管が見つかったのか、イリアはその周囲を酒精綿で丁寧に拭いて、用意していた注射器の針を押し当てた。

「すみません、腕の力を抜いてもらっていいですか？」

オウ力の腕に当てた針が通らないのである。困ったイリアはオウ

力にリラックスするようにお願いするが、一向に針は通らないままその役目を遂げる前に折れてしまった。

「あの、オウ力……」

「……すまない、緊張しているようだ」

平静を取り繕っていたオウ力は、自分の身体が無意識の内に拒否反応を示していたことに今更ながら気付いた。

握り締めていた拳を開くと、掌が汗で湿っていた。

今の自分は冷静でないとイリアの表情を見て、やっと客観的に認めることが出来た。

「緊張、ですか。もしかして体調が優れませんか？ そうでしたら日を改めて登録することも出来ますが」

「いや、少しだけ待つてくれないか？ そうすれば大丈夫だから」
「……分かりました。でも無理なら、声をかけてくださいね」

イリアの思いやる気持ちがおウ力には優しく響き、少しだけ緊張が解^{ほぐ}れるのを感じた。

瞑目し、オウ力は静かに呼吸する。そして、自分の中の心と対話する。

（イリアが俺の血を求めるのは、普通のことだ。ギルドの登録のために必要なだけで、他意はない。今朝見た夢も関係ない……）
まるで自分に言い聞かせるようにオウ力は繰り返す。

瞳を閉じたオウ力を見つめながら、イリアは動揺していた。

彼女にとってオウ力とは理想の強者でもあった。その彼が、緊張していると言った。

あのシンフルベアの群れを圧倒的な力で殲滅した青年が、たかが注射針で怯えているとは信じたくもない事実だった。こんな情けない青年の姿を見たくも無かった。

それ故に、裏切られたという思いが心の底から沸いてくるのを感じる。激情が涙腺にも及んだのか、視界が滲んでゆく。

ミレットにしては本当に珍しい負の感情を制御できず、思わずオウカに掴みかかろうとしたところで、自分の腕を掴む小さな手に気付いた。

「娘よ、ただ聞くだけでよい」

ミレットだけに聞かせるためか、シーアの声は小さく、そして厳かな響きをしていた。

「主は、オウカは複雑な過去を持っており。それ故に、このような姿を見せることもある。実に情けなく、見ていて不愉快な姿であろうよ。」

しかし、それは彼の一面にしか過ぎぬ。我らと戦ったときの勇猛な姿もあれば、お主らと戯れる姿も然りじゃ」

「何であんたに、そんなことが言えるのよ」

心を荒れ狂う感情はまだ収まらないが、ミレットはシーアに話の先を促した。

対するシーアは微笑をすると、逆にミレットに問いを投げかけた。

「何故我に分からぬと決め付ける。我は誰ぞ？」

「……シーアでしょ？」

「そう、我はシーアと名付けられた魔人じゃ。元が魔物であれ、今は主に生命を受け、転生する機会をいただいた従者じゃ。」

生命を受けるとは、その与える者の記憶を受け取るのと同じ行為でもある。それ故に、我にも主の記憶が入っている。それは僅かなものだが、我には重いものよ。

娘よ、オウカ・ライゼスという者の歩いてきた道は一言で表せば、生き地獄よ。

お主は生まれてこのかた、回避できぬほどの不遇に見舞われたことはあるのか？」

滔々と話すシーアの言葉に、ミレットは口が利けなかった。

あの無類の力を振るった青年が、そのような過去を背負っているとは考えてもみなかった。

オウカの力があれば、どんな苦難も逆境も軽く乗り越えられると高をくくり、ミレットの理想像を押し付けていただけなのかもしれない。だから、今のオウカを見て、勝手に裏切られたと思ってしまう。情けない話ではあるが、それが事実だ。

頭と心を支配していた激情はとうに失せていた。

「……わたしには人並み程度のことしかない。それも些細なものよ。それで、オウカの過去について一体どういうものだったの？」

冷静になったミレットはシーアに続きを求めたが、彼女は首を横に振った。

「ここまで言ったのは、我のお節介よ。真に迫る話をするのは本人にしか許されぬ行為じゃのう」

確かにその通りである。人から聞いた話では、その細かい感情は伝わってこない。

（拒絶されるかもしれないけど、今度聞いてみよう）

ミレットは瞑目するオウカを、見守るようにただ見つめるのであった。

深呼吸をしてゆっくりと目を開ける。

目の前にはオウカを案ずるイリアが、黙してそこにいた。

瞑目していたオウカにとってこの時間は必要だった。きっと彼女には聞きたいこともあっただろうが、それを黙って待っていてくれたのは素直に有難かった。

「ありがとう。もう大丈夫だから、続きを頼む」

「分かりました」

イリアは長机に置いてあったもう一本の注射器を手にとって、オウカの右腕の静脈に再び当てる。

一瞬、針は抵抗を覚えたがそれだけで、後はスツと静脈に入ってしまった。慎重にオウカから血液を抜き取るイリアの表情は真剣そのもの。

先程のことが嘘のように採血はあっさりと完了した。その後の処置として、イリアは清潔なガーゼで針の刺さっている場所を押さえながら針を抜き、オウカにその場所を五分ほど押さえておくことを指示する。

当然の流れとして、イリアは使用した注射器と酒精綿は廃棄用ボックスに入れた。感染症などを防ぐためでもあったが、オウカには自分の血が他の事に使用されないことを確認して安堵した。

イリアはその間に採血した血液を生位磁石に移して、正常に稼働しているかを確認した。

生位磁石の表記欄には『オウカ・ライゼス／十八歳／男性／A型』と表示されている。そしてオウカの血で浮き上がった針は、しっかりと彼を射^さしていた。

「無事、オウカの登録は終わりました。これであなたはギルドの正式な開拓者となります」

登録が終了したことを告げるイリアの声には安堵の色が浮かんでいた。

彼女には苦勞をかけたとオウカは感じながら、深く頭を下げた。

「手間を取らせてすまなかった」

「いいえ、手間だなんてそんなつ。これが私の仕事ですから気にしないでください」

慌ててオウカに頭を上げるようにお願いするイリアに、オウカは苦笑しながら頭を上げた。

（これは大きな借りができたかもしれないな……）

イリアは真面目であるため、見えないところで苦勞を負っている。それはオウカが初めて彼女に会ったときも実感したことだが、改めてイリアに何かあったとき、自分が隠している力を行使してでも助けになろうと決意した。

その後の登録は順調に進み、シィアの登録も速やかに終わった。現在人に近い肉体構造を持つシィアの血液は、オウカと同じくA型と判定され、彼の生位磁石と一緒にトランクケースに収納され

た。

「それでオウカ、昨日いただいた結晶のことなんですが」

イリアは開いたトランクケースを眺めて、困ったように話を切り出した。

不審に思いながらもオウカは相槌を打つ。

「ああ、アレか。報酬がどうのって言ってたな」

「ええ、その報酬の件です。あのとき私は門の付近にいる低位の魔物の結晶だと思って安請け合いましたのですが、今朝出勤して確認したところ、担当の方からオウカの振込先口座を確認するようにと、言伝をお願いされました」

彼女はトランクケースから一枚の書類とペンを取り出すと、それをオウカが見やすいように置いた。

内容は今後の報酬支払いに際しての事項がいくつか記載してあった。

「振込先口座って、そんな大げさな。俺は別に少なくとも構わないから、手渡しの方が好みなんだが」

オウカの返答にイリアはやっぱりこの人は、という如何にも呆れた様子で溜め息をついた。

そんなにシンフルベアという魔物の換金率は低いのだろうか。ミレットたちの話ではあの封印区域の中では強力な魔物という印象を受けていただけに、オウカは自分の財布が一段と軽くなるのを感じた。

それならば、開拓者の登録条件が魔物の結晶三個だからといって面倒臭がらずに拾えるだけ拾っとけばよかったと、先程の謙虚さも忘れて意気消沈した。

人間、生きるためには金はどうしても必要なのである。

「オウカのことだから、もしやと思いましたでしたが案の定でしたね。」

昨日、ミレットに詳細を聞きましたが、単独で十匹以上のシンフルベアを倒したそうですね」

オウカにしてみれば、特別に語る事もなかった部分の話なので「

それで？」と、気軽に聞き返す。

そんなオウカの態度に、イリアの頬が一瞬引き攣ったように見え
たのは気のせいではないだろう。

「……実際に持ち込んでいただいた結晶三個を鑑定した結果、全て
シンフルベアのものだと判定されました。報酬は一個あたり七千ダル
になります。今回の報酬は依頼を介していないため、このような金
額になりましたが宜しいですか？」

「……いや、あの、何かの間違いだろ？」

「いいえ、オウカのことでからこの報酬額に何か感じることがある
かもしれませんが、依頼が入っていれば通常の価格相場は一個あた
り一万ダルを下回ることはありません」

あまりにもイリアが淡々と言うものだから、思わずオウカは何か
の冗談かと思っってしまったが、そうでもないということは彼女の顔
を見て分かった。

あの魔物一匹につき、七千ダルということは、今回の報酬は二万
一千ダルということになる。思わぬ高額な報酬にオウカは眩暈を感
じそうになった。

「主よ、どうしたのじゃ？」

「どうしたって、な。あまりの金額に少し眩暈が……」

オウカが戸惑うのも無理はない。一ダルを分かり易いよう日本円
に換算すると、百円に相当する。では、二万一千ダルは二百十万円
相当の金額ということになる。

このような大金だ、それが不意に目の前に提示されたら誰もが冗
談だと思っものである。特にオウカはまだ開拓者になったばかりな
のだから、魔物の討伐に関する金額の相場というものをまったく
言っていないほど知らなかった。

それも依頼を介しての金額ならば一万ダル以上と言うのだから、
この業界がどれだけ危険な仕事を扱っているのか分かる。そして、
命の危険を冒してまで手にする金額としては、これはこれで適正な
のかもしれない。

もつとも、オウカの無比な力を持つてすれば短期間でこれ以上稼ぐことも可能である。現にイリアとミレットはこの金額自体を当然のものとして扱っている。

「オウカが驚くのも無理はないけど、これも仕事だから報酬はちゃんと受け取ったほうがいいよ。開拓者になると色々物入りになるわけだし」

「そうですね。ミレットの言う通り、これからはオウカも開拓者です。『ギフト』の追加申請やホームと呼ばれる施設を借りる機会があれば、これ以上の金額が必要となりますので、まずは受け取ってください」

フオウント姉妹の後押しもあり、オウカは素直にこの報酬を受け取ることにした。オウカ個人の振込先口座を記入し終わると、イリアに渡した。

「確かに受け取りました。では、最後に今後のこの都市での活動はオウカ、ミレット、そしてシィーアちゃんの三人によるメンバー登録で宜しいですね？」

「それで頼む」

「うん、それでお願い」

「うむ、そうなるかのう」

三者三様の返事を受けたイリアは、長机に置いていた最初の用紙にそれぞれの名前の記入をお願いした。

周りはシィーアが字を書けるのか心配していたが、その心配は杞憂だったようで、彼女は達筆な文字で自分の名前を記入した。

一体どこからこのような知識を手に入れたかといえば、当然オウカに生命を吹き込まれたときである。彼の記憶を元にシィーアは独自の話し方と文字の読み書きを習得していた。

全ての書類をトランクケースに入れると、イリアはギルドの職員として最後に饒の言葉を彼らに送った。

「本日を以ってオウカ・ライゼスとシィーア・ライゼスは開拓者となりました。」

私から言えることは少ないですが、これだけは心に留めて置いてください。

開拓者の本分は『種』の破壊になり、非常に多くの危険を伴うこととなります。道半ばで死んでしまうこともあるかもしれません。ですが、まずは生きてください。我々ギルドはあなた方開拓者を、使い捨ての駒のようにして扱う組織ではありません。いつの日か人々が平和に生きられるための支援を行う組織です。

もちろん、それには我々もそして開拓者も含まれています。

だから、生きて、少しでも多く生きて、その未来を叶えましょう」
イリアの言葉には過剰に装飾した美辞麗句はなかった。多分、彼女の本心を言ってくれたのだろう。

それだけにオウカの深いところまでこの言葉は届いた。それはシィアにとっても同様で、彼女も真剣な面持ちで受け止めている。生きて、自分のやれる事を成そう——オウカは当初の目的と新しい目標を胸に抱いた。

彼らに伝えたいことを全て伝えたイリアはすっかりした様子で、ミレットに似た明るい笑顔で彼らを見送った。

「いつてらっしゃい」

こうして、オウカ・ライゼスとシィア・ライゼスは開拓者としての道を歩みだした。

第五話 ギルド登録（後書き）

前回のあとがきで一週間くらいの更新と書いてありましたが、早々に破ってしまい申し訳ございません。

いつも読んでいただいている皆様、そして初めて読んでいただいた皆様、本当にありがとうございます。

誤字脱字やご意見・ご感想などございましたら、お気軽にご指導いただければと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6483w/>

Chaos Blood

2011年10月4日03時36分発行